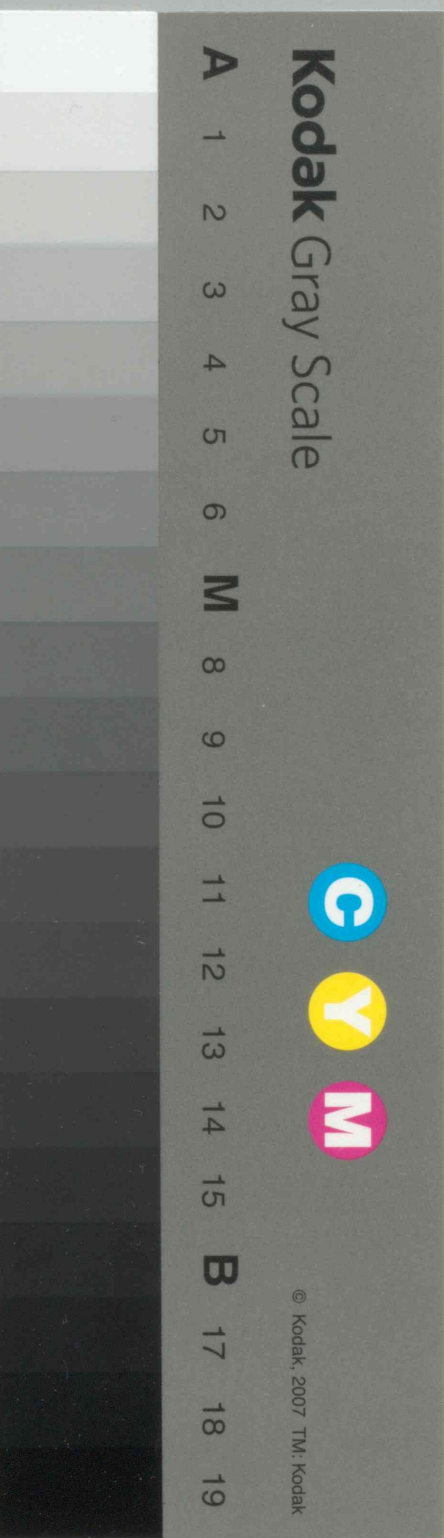
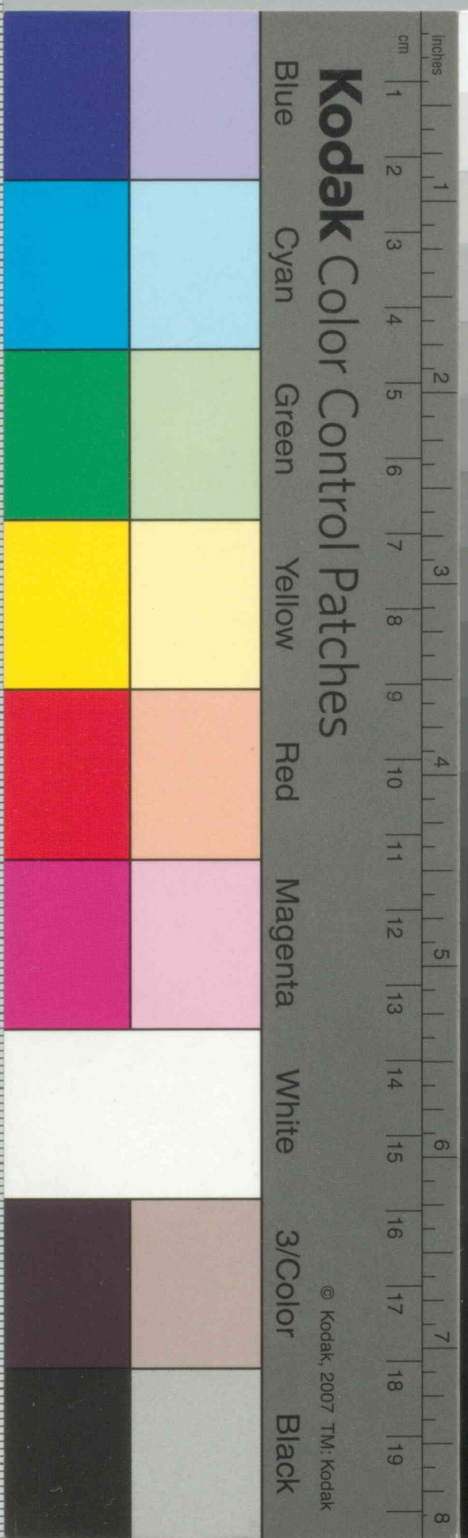


第六訂  
女子國語讀本  
卷九

46  
810  
大14



42210

教科書文庫

4
810
42-1925
20000 67663

Kodak Gray Scale

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





資料室

大正四十二年二月十八日  
教育部檢定  
高等女子學校國語教科書

46  
810  
大14

訂六女子國語讀本 卷九

吉田彌平 篠田利英  
小島政吉 岡田正美

共編



金港堂書籍株式會社

訂六女子國語讀本卷九

目次

一	年中行事	夏目漱石	二
二	雲雀	夏目漱石	二
三	遠山櫻	三	三
四	文學と人生	藤井健治郎	六
五	平安京	藤岡作太郎	三
六	落花の雪	太平記	三
七	萬法一如	姉崎正治	三
八	熊野落	太平記	四

目次



九	生命の直感	相馬御風	三
一〇	嫁菜		三
二	音樂		四
三	敦盛の最期	平家物語	六
三	扇の的	平家物語	六
四	七夕の空を仰ぎて	新城新藏	七
五	花のやど		九
六	人の新盆に	樋口一葉	一五
七	百蟲譜	横井也有	一七
八	義時と泰時	増鏡	二二
九	東路の旅	東關紀行	二五

一〇	千客萬來		二三
三	秋の力	綱島梁川	二四
三	晩節	三宅雪嶺	二七
三	山の温泉から	吉田絃二郎	三三
四	心と言葉	和辻哲郎	三六
五	芭蕉	荻原井泉水	四四
六	死と永生	高山林次郎	五一



六訂女子國語讀本卷九

一年中行事

源氏物語初音の卷。

年立返るあしたの空のけしき、なごりなく曇らぬ麗らかさには、數ならぬ垣根の中だに、雪間の草若やかに色づきそめ、いつしかと氣色だつ霞に木の芽も打ちけぶり、自ら人の心も伸びらかにぞ見ゆるかし。と紫式部の書きし如く、年改まると共に人の心も自ら新しくなること、今も昔も異なることなし。

門には松竹を飾り、床の間には蓬萊又は鏡餅を供へ、家人は

一年中行事

一



各、新しき衣服に換へ大人も若返りて歌骨牌羽根突の遊に交る。即ち氣分を新たにして一年の旅を壯にする者なり。元祿時代の俳句に、

\*志田野坡の句。

長松が親の名で來る御慶かな。

昨日まで丁稚代りに商品を配達せし長松が、元日には禮服して何屋何兵衛の名を以て來る、皆氣分の新たなるを語るものなり。

二日には、學童は書初をなし、商家は賣初をなす。此の日商店への入荷は旗を立て車を飾り、馬には盛裝せしめ、或は馬鹿囃樂隊等にて景氣を添へ、賑はしく牽込む、之を初荷といふ。新年節句などの如き昔よりの祝日は、土地により舊曆

を以て行ふ處あり。

昔は二月八日に針供養とて針の祭をなしたり。婦人は此の日裁縫を休み、針を豆腐にさして色々の供物を捧げたり。軟かなる處に針を休養せしむる心なるべし。子供らしき所業なれども、優しき趣向なりといふべし。

三月三日の雛祭は、女の節句とて、女子を主とする祝日なり。支那の故事は姑くおき、雛祭は中古まゝごとのやうなりし遊の變じ來りたるなり。雛は内裏雛などいひて雲上の貴人に擬し、小さく愛らしき器具調度を飾り立て、白酒草餅を供へ、蛤白魚などを調理して人をも饗應す。雛は一家の女子各、一對を所有するが常なれば、古き新しき色々並ぶこと



あり。狂句に、

嫁が来て仙洞になる母の雛。

春季皇靈祭は所謂彼岸の中日にして、野邊の草木も盛に萌出で、農藝界には此の頃種を下す野菜草花甚だ多し。彼岸櫻咲初めてより、世は花の世となりて、櫻、藤、牡丹、花、菖蒲、つぎに盛を極むと雖も、四月よりは養蠶の準備忙しくして、蠶兒成長すれば晝夜暇なく、蠶業地の婦人は花を見るべき餘裕あらざるなり。「好花、時節不關身」といふべし。

五月の初には八十八夜とて、立春より八十八日目に當る日あり。此の頃に別れ霜とて、最後の霜置くことある故、苗代田は之を過ぎて萌芽するやう種子を下すなり。

五月五日は三月三日に對して男の節句とす。この日を佳節として祝することは聖武天皇の頃より行はれたること歴史に見ゆれば、その由來は頗る古しと謂ふべし。男兒ある家には幟を立て、五月人形と稱する武者人形を飾る。幟に畫き、人形に造る鍾馗は支那の神仙の如きものにして、その力能く惡鬼を追拂ふと稱す。軒に菖蒲を葺き、室に藥玉を懸け、粽を食するは、以て邪氣を去り疫癘を避くるなりと云ふ。舊曆の五月は次第に暑氣に向ひ、梅雨に入る時候なるを以て、邪氣疫癘を追拂ふ方法として行ひたるものなるべし。

梅雨は歌詞のさみだれにして、屢、杜鵑と配合せられて夏季



の景物たり。農家は此の雨によりて田植の水を得るなり。田植は農家の最も祝福する作業にして、土地によりて、女子は皆新しき單衣を着て色々の襷をかけ、頭には新しき手拭を冠り、又はそろひの笠をかぶりて田に立つ。田植人は一列に並び、左の手に苗を持ち、右の手にて植ゑながら後退するに、互に後れず先だたず、兩手に少しの暇なし。

\*  
乗捨の句。

\*  
さをとめや泣く子の方へ植ゑて行く。

此の頃農家は亦麥の收納に忙し。かくて後屢、田の草取を行ふ。暑中の草取は農家の最も困苦する所にして、明治天皇の御製よく此の情を悉せり。暑しともいはれざりけり、にえかへる

水田に立てる賤を思へば。

暑寒の至らんとする前には、呉服屋は賣出しをなして夏物冬物を供給す。甘藷屋の八里半いつのまにか氷店の硝子簾に變じて、早替りを演ずるも亦季節交代の時なり。七月十三日より十五日までは盆の魂祭なり。盆とは梵語孟蘭盆の畧にして、困める靈魂を救ふ意なり。大抵十三日には墓參をなし、家々に魂棚即ち精靈棚を設けて、草花野菜果物及び日々の食膳を供す。是等の用品は豫め草市即ち盆市にて賣るなり。正月十五日を上元といひ、七月十五日を中元といふは印度曆にて満月を月初とするより來りし者にして、雇人は此のころ、やぶいりをなす。やぶいりは彼



等が一年二度の行樂の日なり。

さる程に九月にもなり、二百十日の厄日も事なく過ぐれば今年の稻作も心安し。舊曆八月十五夜の月見、九月十三夜の後の月見を経て、豆は實のり、芋は肥ゆ。早稻の稻刈は已に八月に始り、晚稻は十一月に至る。新穀を伊勢神宮に奉らるゝ神嘗祭も、又諸神に進め、天皇陛下も聞召す新嘗祭も、皆此の秋收の頃に行はるゝなり。

稻刈は農家主要の作業にして、之を終ふれば、祝宴を開きて親族知人を招く。此の頃村々には鎮守の秋祭ありて、神輿の渡御、山車の通過等あり。子女は櫃の底の盛装を着け、家思ひくゝの料理を調へ、或は鎮守境内に持寄りて、西洋に

所謂ピクニックの行樂をなす。父老は宮酒に酔ひて、或は唄ひ或は踊る、蓋し年中の最大樂事なり。支那にても春社秋社とて、我が國の春秋の祭禮の如きあり。互に相似たる事ありきと見えて、

\* 桑柘影斜秋社散。 家々扶得醉人歸。

\* 唐の王駕の詩。

商家にては十月二十日に惠比須神を祭りて宴會す、之を惠比須講といふ。惠比須神の由來明かならざれど、攝津國西宮神社に祭れる蛭子神なるべしといふ。關西にては十日戎とて、正月十日に此の社に參拜する者多し。東京には、惠比須講の前日に其の供物飾物等を賣る市ありて、同時に淺漬大根を賣り、糠麴のべつたりと附きたる儘渡す故、惡戯を



好む者は之を提げて、途上の着飾りたる婦人に近づき、べつたらだ。と言ひて驚かす者昔は多かりしを以て、此の市をべつたら市と云へり。

書き來れば、兒戲の如く夢幻の如き事多しと雖も、かゝる所作に生活の單調を破りて、倦まず撓まず進む程に、知らず識らず一年の終に近づく。年の市には門松注連繩羽子板等新年の用品を賣る。三月の雛市、五月の人形市より、草市べつたら市年の市等に賣る所の一時の商品をばすべて際物といふ。さて餅搗く音も遠近に聞えて、世は又新年に入らんとす。

\*春道列樹の歌。

\*きのふと過ぎ、けふと暮らしてあすか川、

流れてはやき月日なりけり。

顧みれば一年の豫定を十分に遂げ得ざりし者多かるべし。吾も人も、來年は來年は。と同じ言を繰返し、かくして年々進歩向上の道をたどり行くなり。

來年はくとして暮れにけり。

名は金之助。文學者。大正五年歿す。

二 雲雀

夏 目 漱 石

忽ち足下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、何處で鳴いてゐるか影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明かに聞える。せつせとせはしなく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されてたまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴きつく



し、鳴きあかし、又鳴きくらさをなければ氣が濟まぬと見える。其の上何處までも登つて行く。いつまでも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は流れて雲に入つて漂うて居る中に、形は消えて、無くなつて、たゞ聲だけが空の裡に残るかも知れない。春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居處さへ忘れて正體が無くなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に目が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂の在處が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものゝ中で、あれ程元氣のあるものは無い。

\*英國の詩人。  
1792—1822

あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。ふとシエレーの詩を思ひ出して、口の内で覺えた處だけ誦して見たが、覺えてゐる所は二三句しか無かつた。前を見ては、後へを見ては、物欲しと憧るゝかなわれ。腹からの笑といへど、苦みは、そこにあるべし。美しき極みの歌に、悲しさの極みの想籠るとぞ知る。なるほどいくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、前後を忘却して、一心不亂に我が喜を歌ふわけには行くまい。(鶉籠)

三 遠山櫻



遠山楳

さくら花はさにかうもあびきの  
やまねひよりみゆるまらも契之

楳のうら

ゆきとわさぶらあを楳花  
いんあれと、風ひくくむ杉植

蓮のうら

はらす葉のよごりにまわこらう  
なまりのうらをふまにあびく通眼

ひさしくれ月のうらもあきいさほ  
み葉をればやうりまらうらむ忠考

杖をうはつうらむぎんぬなる  
うらなまらうをかくてあつらむ友鳥

やまといひさうらうてあす川  
たがねてあきほさむらけり列樹



よみ申にさうつねなるあすぶは  
 きふのよちぎけふはせうれ

まほのふちぎのいろになんちり  
 きふのよちぎはやちよとぞしく

ほのぼの  
 あしはるの  
 ひさぢりり  
 一まはれゆ  
 少はるが  
 ねも  
 小

ほのぼの  
 あしはるの  
 ひさぢりり  
 一まはれゆ  
 少はるが  
 ねも  
 小



\*倫理學者。  
文學博士。  
京都帝國大學教  
授。

四 文學と人生 文學の縮圖 藤井健治郎

文學とは何であるか。文學は人生の縮圖である。海のやうに廣い人生の中にあらはれた百般の姿を鏡のやうに狭いものゝ上にさながらに描寫したものである。しからは人生とは何であるか。よく世間では、吉凶禍福は糾へる繩の如し。と言ふが、人の運命は實に糾へる繩の如きにはとゞまらない。かの大空に横たはれる雲のやうに、有るかと思れば消え、消えたかと思れば涌き、海かと思れば山、龍かと見れば虎、乍ちにして淡く、乍ちにして濃く、變幻出沒殆ど端倪することの出來ないやうなものである。唯此の一

片の雲でさへ、少からず吾等の感興を惹くものを、それよりも更に奇妙で、更に變化のある此の人生の波瀾動搖が、どうして君等の感興を惹き起さずにあらう。變幻出沒極りないのが人生の姿である。これが人生であるかと思れば、忽ち其の姿を變へ、それが真相かと思れば、また忽ち消えて跡を晦ます。凡手は容易に之を捉へることが出來ず、凡眼はなかく、其の真相を認めることが出來ない。而も捉へ難ければ捉へ難い程、認めにくければ認めにくい程、之を捉へたい、認めたいと思ふのは、誰しもの人情である。しかるに詩人は其の靈妙な腕と其の鋭敏な眼とを以て、其の捉へ難い人生の真相をしつかりと捉へて來て、それを世人の前に



橋本氏。畫家。  
東京美術學校教  
授。帝室技藝委  
員。明治四十  
一年歿す。

平沙落雁  
遠浦歸帆  
山市晴嵐  
江天暮雪  
洞庭秋月  
瀟湘夜雨  
漁村夕照  
煙寺晚鐘

示すのである。是が文學である。そこで世人は堪らない、自分の求めて得られなかつた物が眼前に現れるから、自づとひきつけられて、観ても観飽きる事がないのである。文學は人生の縮圖であると云ふ、其の大體の意味は今言つた通りであるが、猶こゝに一つの疑が残つて居る。雅邦の描いた瀟湘の八景は、かの洞庭湖邊の大觀の縮圖である。又其の邊で賣つて居る八景の寫眞もやはり同じ處の縮圖である。寧ろ寫眞の方は、實際のまゝ一木一石少しも實景と違はずに寫されて居るが、雅邦の描いたものはさうでない、精密に見れば、實際に生えて居ない木が生えて居たり、實際にある巖が省かれて居たりする。併しながら兩者共に

かの美しい景色の縮圖たるに於ては同一である。文學は人生の縮圖であると云ふ、其の縮圖は彼の繪畫的縮圖か、寫眞的縮圖か、是が残つて居る所の問題である。此の問題には一刀兩斷に答へることが出来る。凡そ文學ともあらう程のものは、必ず繪畫的の縮圖であり、又あるべきものであることは、疑がない。成程たゞ縮圖といふ點から見たならば、寫眞の方は遙かに精密な縮圖であらう。しかしよく考へて見れば、さう言へないことは明かである。凡そ物には要といふ點がある。其の要を捉へさへすれば、其の他は之をあげるには及ばないのである。實際のものには穢い處もあり、醜い處もあり、又不完全な處もある。必



要の點以上に、此等のものをも残らず擧げる時には、却て吾等の感興を害ひ、吾等の想像を破つて、かの湖邊の美を發揮しようとした折角の努力の如きも、却て失敗の基となるのである。それ故たゞ湖邊の美觀の極めて肝要な場處をば、極めて適勁に描いて、其の他は總べて觀者の想像に任せる方が、其の美觀を眞に發揮する所以であらうと思ふ。それ故美を發揮する方からいへば、雅邦の縮圖こそ眞成の縮圖であると言はなければならぬ。そこで此の人生百般の姿を捉へて、吾等が美的感興の對象となし、美的趣味を満足せしめようと云ふ文學は、必ず繪畫的縮圖たるべき事は殆ど絮説する必要もないことゝ信ぜられる。

文學とは何であるか。文學は人生の救である。

凡そ吾等に、苦み惱みのあるのは「我」といふものがある爲である。「我」あるが故に空な望を起し、限ない慾を逞しうしよるとするのである。「我」あるが故に世間の名譽の奴となり、黄金の僕となるのである。「我」あればこそ憎惡もあり怨恨もあるのである。名譽の奴となり、黄金の僕となり、憎惡怨恨の焰に燃されるから、そこで此の世に苦みと云ふものがあるのである。さればこそ菩提樹下に大悟徹底された大聖も「我」をもつて一切苦の根本とせられたのである。若し吾等が此の我執を離れ妄見を脱することを得たならば、吾等の意は如何に安らかに、吾等の情は如何に爽かであらう。

\*釋迦。



そこで吾等をして此の我執を離れ妄見を脱せしめるに最も適當なものは何であるか。それは文學に外ならぬのである。吾等が美しい詩や歌を吟詠し、戯曲小説を玩味する時には、全く身を一種の別天地に移して、一切の我執妄見は茲に全く消滅して讀行く自己と讀まれる文學とが一つに融け合つて、只何となく愉悅・満足の思をするものである。而もこれは暫に一時の愉快といふのではなくて、永く我等の生涯に影響を及すものである。固より獨り文學と謂はず、其の他の藝術も皆吾等を靈化する力を持つて居るには相違ないが、音樂なり繪畫なりは多少専門の修養を要し、普通の人は其の力に繼つて十分の救を得ることがむづかしい。

然るに文學にはさういふ専門的要素が少い。其の文章を解し得る人でさへあれば、誰でも相當に其の救にあづかることが出来る。これ文學は解脱の近道であると云ふ所以である。

凡そ吾等人間を救ふものにはその種類が三つある。第一は只今述べた文學の力、第二は道德の力、第三は宗教の力である。文學は感情によつて直覺的に救の任務を果さうとし、道德は意志によつて漸進的に救はうとし、宗教は其の中間に立つて、半面は感情によつて、半面は意志によつて救はうとするものである。此の三者は此の如く分け分のぼる籠の路こそ違へ、つまりは同じ高嶺の月を見ようとするもの

\*  
分けのぼる籠の  
道は多けれど同  
じ高嶺の月を見  
るかな。



である。斯様に考へれば、其の何れの道によつて救を求め  
るのも、其の人々の自由であつて、必ずしも己れに同じ者に  
黨して、異なる者を伐つ必要のない事は明かである。  
併し斯く言へば、かならず、單に文學か道徳かの一方によつ  
て、果して全き人格の救が得られようか。と問ふものがある  
であらう。私は必ず之に對して、可能である。と答へる。眞  
に美なるものは又必ず善を兼ね、眞に善なるものは又必ず  
美を含んで居るものである。善を兼ねない美はなく、美を  
含まない善はない。されば眞に美なる文學によつて救は  
れる者は、人格全體の救であり、眞に善なる法則によつて救  
はれるものも、矢張人格全體の救であると思ふ。

(一) 鎌倉圓覺寺開山  
祖元。

(二) 藤田東湖の正氣  
歌。

(三) 坪内逍遙の作つ  
た戯曲。

文學とは何であるか。文學は人生の力である。  
虜囚の爲に非業の最期を遂げようとした禪僧が、纔かに生  
命を全うすることを得たのは何の力によるか。彼が死に  
臨んで泰然として吟詠した一絶の力ではないか。幾多幕  
末の志士をして國體の尊きに感奮興起せしめた一篇の古  
詩は、今日猶凜として生氣があるではないか。徒に理想に  
あこがれて、老いた父母にさんく、歎を見せ、後でやつぱり  
其の父母が慕はしくなつて、現實界に來た、新曲浦島の太郎  
は、幾多熱血の涌きかへる青年に向つて、理想は現實を離れ  
て求めることは出來ない、唯此の現實界をさながらに淨土  
と觀じ極樂と化すべきものであるといふ信念を鼓吹した



ではなからうか。涙に沈んでゐる婦女、貧に苦しんでゐる青年をして、再び生氣を呼起して蘇生せしめるものは、總べてこれ文學ではないか。文學は人生の力である。此の力を得て此の力を利用しようとし、此の力によつて其の天福に與らうとする勞力は、凡そ人間の努力中にあつて、最も神聖な、また最も高尚な努力の一つである。宗教家が其の力を利用して、自己の信ずる福音を傳へ、政治家が其の力を利用して、治國濟民の具としたことは、古今東西その例に乏しくない。

實に文學は人生救濟の具として、道德宗教と並び立つものである。従つて此等三者の間には、互に相聯絡交通する所がある。故に文學の力の最も直接に其の影響を及すのは、道德の方面である。今文學者の立場からでなく、社會現象の一として文學を見る時には、其の影響は直接又は間接に益、道德を助けて、之を高尚にするか、若しくは其の反對に直接又は間接に道德を破つて、之を墮落せしめるかといふ問題に歸着する。

固より私は一概に現代の作物を上乗の文學と心得て、之を鼓吹するものではない。現代の作品より更に高尚なもののあることを忘れてはならぬ。文學と風教との關係も理想境に達しない現實の世界、現實の人生に於ては、十分に考量せねばならぬ。現今の道德に悖戾するやうな文學は、之



を禁止するのも己むを得ないことであらう。併し又一般讀者の趣味が、漸々高尚になれば、文學上の作品も漸次理想に近づくべき筈である。要するに理想は善美一致の境にあるのである。(時代思潮)

五 平安京

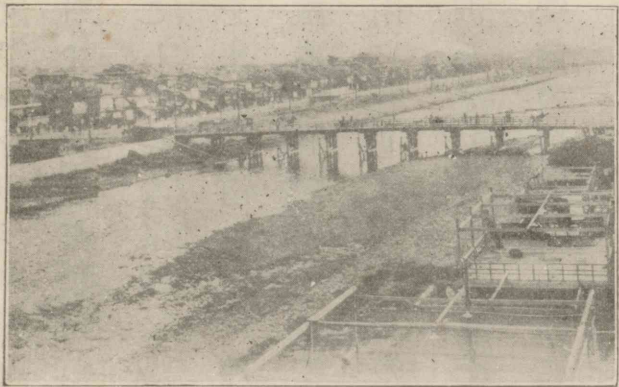
藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり。山川の風景行く處として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を鍾め、群を抜いて立てるは京都なり。京都附近の景は、日本のすべての景をエキスにしたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存ぜずといへども、嘩麗幽艶の形態は備らざるなし。東に近く

國文學者。東京帝國大學文科大學助教授。文學博士。明治四十三年歿す。

英語のエキストラクトの略。精粹を抜き出したるもの、意。

比叡如意ヶ嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、北



京 都 鴨 川

には鞍馬貴船氷室鷹が峰、高雄の山々波濤の如く、西にやゝ隔りて愛宕小倉龜山嵐山松尾より山崎に至りて地勢窮る。松柏の綠色濃きなかに、或は目さむるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織りこみたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などの、わけて、朝日夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神



樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、子の日の遊に小松曳く樂みなど、何れ劣らぬところから。南にや、隔りて男山これに對するが、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐもかしこし。京の東端に沿うて、鴨川の流ながれの河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少しく離れて桂川、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しく、また南にむかふ。二河南に合し、さらに淀の急流に流込みて、沈々として西の方難波をさして走る。茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふる材料に乏しといへども、一面よりいへば、山のうちにこもりて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配や、急なれば、蘆間に

出入る白帆の町の側を往來するながめなきかはりに、濁りて底の明かならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸にうち上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫などの居る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしといへども、海なくして、清き京都は益清きなり。山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表せり。何處の山水も、日中より朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむる所なるを知らば、三面を山にして、土地濕潤水分を含むことの殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富める



かは説明を須ひずとも明かなるべし。嘗て一夏を北陸の  
 海岸に送れることありき。一日  
 驟雨の至るを見る。疾風さと吹  
 き、浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如  
 く、見るがうちに重なり重なりて  
 海を覆ふ。波の音は雲の中にあ  
 り。電光閃々、磨る墨の雲間に火  
 花を散らす。波か雷か。世界は  
 唯、一暗黒の中に没し去るかと思  
 はれて、凄じかりき。かくのごと  
 く壯絶なる景は、わが數年の滯留中、遂に京都にては見るこ



望遠の山東

\*  
 薄圍着て曉たる  
 姿や東山。  
 (風雪)

とを得ざりき。されど、下京より吉田に通ひたる朝な  
 の景色の、今も恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞  
 に三條の大橋の擬寶珠の、一つく彼方へくと淡くなり  
 て、向ふに寝たる東山は、未だあるかなきかの夢より覺めや  
 らず、吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花  
 賣のをとめの姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。時雨  
 の景色の又よその國には見られぬ様よ。愛宕の峯の覆ひ  
 て白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちにはらく  
 と面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて、直ちに東  
 山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡り  
 するなるべし。かゝる優しき景色は山河襟帶の平安京の



特色なり。(國文學全史)

六 落花の雪

太平記

(一) 右中辨藤原俊基  
(二) 後醍醐天皇の正  
中元年。

俊基朝臣は先年土岐十郎頼貞が討たれしのち、召捕はれて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣、實にもとて赦免せられたりけるが、また今度の白狀共に専ら隱謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、また六波羅へ召捕はれて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さるるは法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失はるか、鎌倉にて斬らるるか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

(三) 元徳二年。

(一) またや見ん交野  
のみの、櫻狩花  
の雪ちる春の曙  
(藤原俊成)  
(二) 朝まだき嵐の山  
の寒ければ紅葉  
の錦きぬ人ぞな  
き。(藤原公任)

(三) 近江より朝立ち  
くればうねの野  
にたづぞなくな  
る明けぬこの夜  
は。(古今集)  
(四) 白露も時雨もい  
たくもる山は下  
葉のこらず色づ  
きにけり。  
(紀貫之)

落花の雪に踏みまよふ片野の春の櫻狩、紅葉の錦を着てかへる嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも旅寝となればものうきに、恩愛のちぎり浅からぬ我が故郷の妻子をば行方も知らず思ひ置き、年久しくも住みなれし九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出でたまふ心のうちぞあはれなる。  
憂きをばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱。沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く身をうき船のうきしづみ、駒もとゞると踏鳴らす勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみぢや、世をうねの野に鳴く鶴も子を思ふかと哀なり。時雨もいたくもり山の木下露に袖



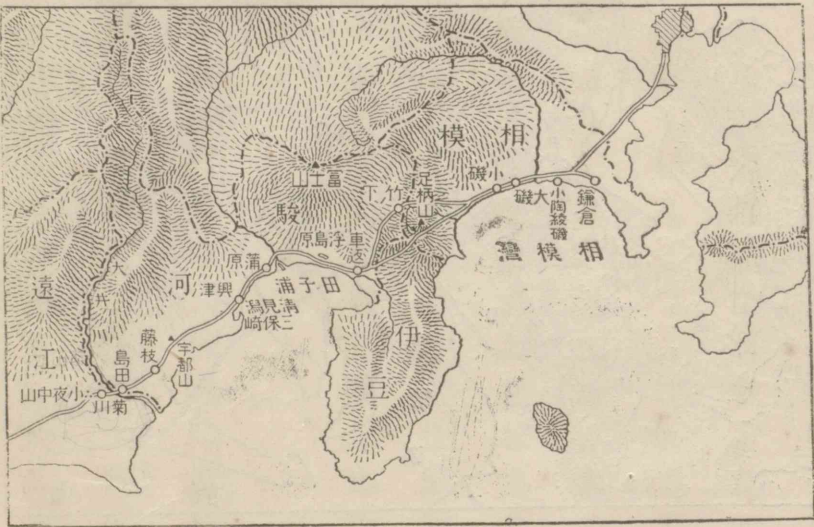
ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山  
はありとても、泪に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間  
にもおいそのもりの下草に、駒を止めて顧みる、故郷を雲や  
隔つらん。

番場醒井柏原、不破の關屋は荒果て、なほもるものは秋の  
雨。いつか我がみのをはりなる熱田の八劍伏拜み、汐干に  
今やなるみがた。かたぶく月に道見えて、明けぬ暮れぬと  
行く道の末は何處ととほたふみ、濱名の橋の夕汐に引く人  
もなき捨小船、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれとゆ  
ふぐれの晚鐘鳴れば、今はとて池田の宿に着き給ふ。  
旅館の燈幽かにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍

人住まぬ不破の  
關屋の板庇荒れ  
にし後は只秋の  
風。(藤原長經)

小夜干鳥聲こそ  
近くなるみがた  
傾く月にしほや  
みつらん。  
(藤原季能)

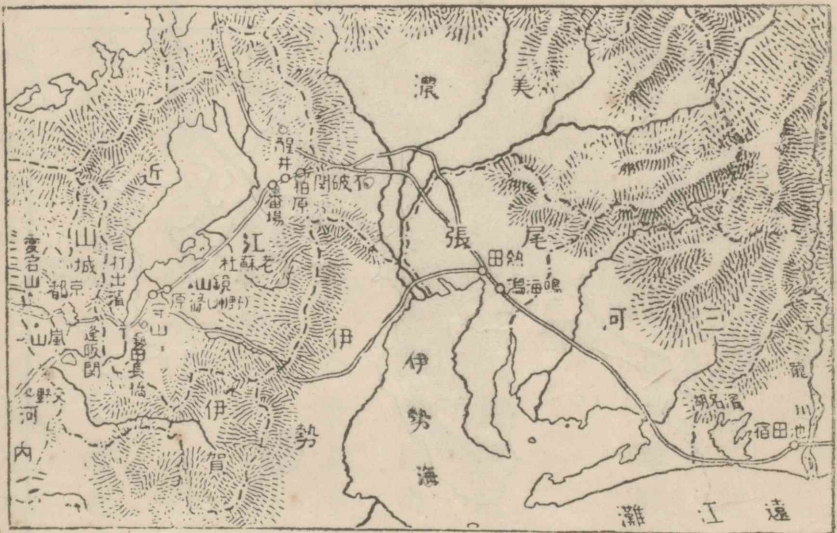
\*年たけてまた越  
ゆべしと思ひき  
や命なりけりさ  
やの中山。



川を打渡り、小夜の中山越え  
行けば、白雲路を埋み来て、そ  
ことも知らぬ夕暮に、家郷の  
天を望みても、昔西行法師が  
「命なりけり。」と詠じつゝ、二度  
越えしあとまでもうらやま  
しくぞ思はれける。  
隙行く駒の足はやみ、日己に  
亭午にのぼれば、餉進らする  
程とて輿を庭前に昇止む。  
轅を叩きて警固の武士を近



\*中納言藤原宗行。



づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊  
 川と申すなり。と答へければ、  
 承久の合戦の時院宣書きた  
 りし咎に因りて、宗行卿關東  
 へ召下されしが、此の宿にて  
 誅せられしとき、  
 昔南陽縣菊水汲下流而延  
 命、  
 今東海道菊川宿西岸而終  
 と書きたりし遠き昔の筆の

跡、今は我が身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首  
 の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへも、かゝるためしをきく川の

おなじながれに身をやしづめん。

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸  
 の嵐の山の花ざかり、龍頭鷄首の船に乗り、詩歌管絃の宴に  
 侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給  
 ふ。

島田藤枝に懸りて岡邊の眞葛裏枯れて物悲しき夕暮に、宇  
 都の山邊を越え行けば、蔦楓いとしげりて、道もなし。昔業  
 平の中將の住む處を覓めんとて、東の方に下るとして、夢にも

山城葛野郡嵯峨  
にある離宮。

跡り来る程はな  
 けれど朝露の岡  
 邊の眞葛うら枯  
 れにけり。  
 (藤原爲家)

駿河なるうつ  
 の山べのうつしに  
 も夢にも人にあ  
 はぬなりけり。



人に逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ知られ  
たり。

(一) 清見瀉浦風さむ  
き夜なは夢  
もゆるさぬ波の  
關守。

(院大納言典侍)

(二) 富士のねの煙は  
なほぞ立ちのぼ  
る。上なきもの  
は思なりけり。

(藤原家隆)

(三) 元弘元年。

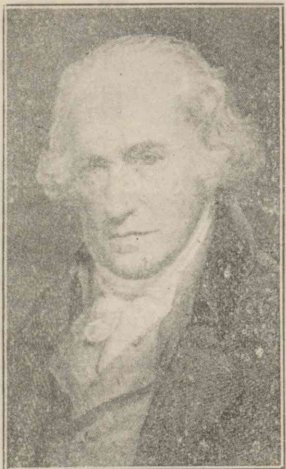
清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守に  
いとゞ涙を催され、むかふはいづこ、みほが崎、興津、蒲原、打過  
ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙上なき思に  
比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、汐干  
や淺き、船浮きて、おりたつ田子のみづからも浮世をめぐる  
車がへし。竹の下道行きなやむ足柄山の峠より、大磯、小磯  
見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれ  
ども、日數つもれば七月二十六日の暮程に鎌倉にこそ着き  
給ひけれ。

七 萬法一如

姉崎 正治

(一) 哲學者。  
文學博士。  
東京帝國大學教  
授。  
嘲風と號す。

(二) イギリスの大數  
學者・大物理學  
者。  
1642-1727



ニュートン

科學の根本假定は萬法一如の信仰に在る。其の仕事は、之  
を事實に徴して證明するに在る。而して其の實行は、即ち過  
去百年の間の科學が、人生を改  
造した實用にあらはれてゐる。  
ニュートンは林檎一つが枝から落ちるのを見て、其の一現  
象が獨り地上の物ばかりでなく、弘く廣漠の天體をも支配  
して居ると同じ力である事に想到して、茲に重力の觀念を  
得、運動の三原則を立てた。彼は十八年の間此の理を考へ



に考へたと云つて居るが彼の信仰には、林檎一つを落す力が萬法に行はれて一如であるとの一事に集中したのである。即ち彼が大発見の根本は、林檎一つの中に宇宙天體に互つて變らない萬法一如を感得したのにある。古往今來、<sup>コト</sup>林檎が樹から落ちるのを見、石は水に沈み、木の葉は水に浮び、日月は運行し、星辰は空に懸るのを見る人は幾億とは限られぬ。然るに、一人として其の中に萬法一如の理を空に夢みる事もしなかつた。林檎一つの中にも、天體を支配すると同じ力の行はれるなどいふ空想に、想ひ到るものもなかつた。それにニュートンが此の空想を一つ抱へて、十八年の間かゝつて、到頭其の一如の理を數學的に言ひ表し、其

の空想を事實に證明した。物理学の基礎が立ち、其の應用で百般の實用を作り出した源は、實にニュートンが林檎一つから想ひ付いた空想の力でなからうか。



ト ッ ト

蒸氣機關の應用は、今日世界人類の運命を支配して居る現實の大勢力である。工業も航海も海軍も、皆此の恩恵で、其の大きな仕事を爲しつ

つある。而して此の蒸氣機關は、ニュートンの林檎と同じくワットの土瓶一つから出て來た不思議な勢力である。イギリスのニューカッスルの停車場には、今日も尙スチー

(一) イギリスの機械學者。  
1736—1819  
(二) イングランドの東北部の都會。石炭の輸出港。  
(三) イギリスの工業者。  
1781—1848



ヴンソンの始めて作つた蒸氣機關を記念として据附けてある。それを見る者は、此の眇たる一構造が、百年以來世界の面目を全く一變し、人類の生活に大改革を來した勢力に



ンソンダーチス

想ひ到つて、驚嘆の念を發せずには居られない。併し此の最初の蒸氣機關は、現實を追ふ小細工の發明で出來たのではなく、ワットが一つの土瓶の中に見て、その中に天地に互つて變らない大勢力を想像したのに始つたのである。彼は土瓶にぶつゝ湧く湯氣の中に、世界到る所、古今を通じて易らない勢力を見た。此の勢力を土瓶の水に見て、し

かも之を單にその土瓶の中だけの現實の事とせず、又其の時、其の處だけの力と見ないで、此の力が到る處に、又何時でも發現し得る萬法一如を見たからこそ、それで此の大變革の勢力を作り出したのである。

而して彼が土瓶の水一つから想ひついた一空想が、空想でなかつた證據には、其の構造を整へて湯を沸かしさへすれば、天涯地角、何處にも湯氣の大勢力が發現して、大船を行きもすれば大鐵槌をも動かす。只現實だけを確實として、其の他の空想を無益だと放棄する人は、土瓶一つの中に此の如き大事實を夢み、土瓶の水の中から此の様な大勢力を誘ひ出す事をなし得ようか。ワットは、實に土瓶から、世界人



類の運命を支配する大怪力を出したのである。今日世界  
到る處に蒸氣機關の運轉するのを見、又其の恩澤に浴し、又  
其の力に驚く人は、ニューカッスルの停車場に在る最初の  
蒸氣機關が、其の祖先である事を考へなければならぬ。而  
して又、ニューカッスルにある親の蒸氣機關を見る者は、そ  
れがワットの爐邊に在つた土瓶から出た事を思ふ義務が  
ある。自分はニューカッスルの停車場に立つて、尙一つワ  
ットの土瓶が其處に据ゑつけてないのを遺憾に思つた。「  
イスパニアの化學者が、其の實驗室の中で、藍汁アズールからアニリ  
ン色素を取出すことを始めた。此の發見が後年に發達し  
て、石炭タールの中からアニリン色素を採り、眞黒の石炭か

らあらゆる色素を取り出すことになつて、世界の工業に大  
變革を與へるやうになつた。我々はアニリン色素の豊富  
な色彩を見ては、此等がどうして石炭の中から取れるかと  
驚かざるを得ない。アニリン色素の發見は實に、炭は黒く  
雪は白い。といふ現實的確の經驗を打破した。併し此には  
何の不思議も無い。時を經處を隔て、も、萬法一如の理が  
變らぬ事を思へば、炭から色の出るのは至當の事である。  
誠に考へて見よ、何十萬年の昔、此の大地が鬱蒼たる林樹に  
蔽はれて居つた時代がある。大根大莖、大葉大花、乃至小根  
小莖、小葉小花あらゆる植物が鬱々として茂つて、其の花の  
紅紫黃白、葉の色々、幹や皮の色彩、見渡す限り、如何に多彩の



世界であつたであらう。その大森林が倒れ、て段々土中に埋つた。其の根莖花葉の大部分は分解したが根本の植物質は地中で固つて、黒くなつて今日まで隠れて居る。それは即ち石炭である。その石炭を掘り出して我々がそれを色々に使ふ。熱や光にも使ふが、又其の中に残つた植物成分を利用して色々に使ひ分けると、茲に多彩多色のアニリン色素を生ずる。

斯う見れば、今我々が黒い石炭タールから得る無限の色彩は、實に幾十萬年昔の大森林を色どつて居た花や葉や幹の色である。然らば子供等の着てゐる着物の色彩、婦人達の誇とする紅紫の裝飾の中に、我々は幾十萬年前の花や葉の

色を見て居るのではないか。我々は居ながら今の世界に、非常に古代の森林の花見をし得るのである。アニリン色素の實用は、實利として實に貴ぶべきものであるが、此と同時、其の色を眺めて、我々は此の遠方の花見といふ大空想を事實にしつゝある。

今日はまたガスや電氣の應用が盛で、都會の町々は其の光明で不夜城を現す。その光明は日光と別な物であらうか。多くの人はガスや電燈に馴れてしまつて、夜が來れば明りがつくと思つてゐるが、其の明りはガス會社の釜や發電所のボイラーから出る力である。而して其の力は石炭を燃やすから出、その石炭は炭山から掘り出したもので、炭山は



即ち萬古の森林を地中に貯藏してをるのである。其の時の太陽の光と熱とである。世界を蔽ふ森林が地中に埋もれ、石炭となつて今日に残り、其の石炭の火力で機械が運動して電燈になり、石炭を焚いて出來たガスがあかりをつけ、物の煮焚きをする。然らば今日我々が、ガス燈や電燈で家の中、町の外を照してをる不夜城の光は、其の古の日の光、電氣で室を暖め、ガスで煮焚きをする熱は、やはり其の太陽の熱である。地球は幾萬年の間、太陽の光と熱とを石炭の形で貯へて置いてくれた、その貯光貯熱を今日我々が使つて居る。其の外、水力で電氣を起すにしても、太陽の熱が水を蒸發させ、その水が空中

に上り、雨となつて山の上に落ち、集つて流れ、それから力となり、光や熱となる。茲にも萬法一如の理が行はれ、實用の中に大なる空想の種を包んでをる。現實の太陽だけが太陽ではない、電燈の中には古の日光を見得る。其の他、電話、飛行機、これらも皆空想からの所産である。何れにしても我々は、空想の力を十分認めなければならぬ。眼前の實利實用を追ふのみでは、大實利は現れない。只管、實利實用ばかりを重んじて、少しでも現實以上の理想に進まうとすれば、空想だ有害だと誹謗するのは、よほど考へなければならぬことである。

科學の根本は萬法一如の大信仰にある。科學研究の祕鑰



は、差別の中に平等を發揮し、一物の中に萬法に互る大勢力を發見しようといふ熱心一つにある。此の熱心即ち現實以上の理想、まだ耳目に現れない空想、一々の研究實驗の根本に横たはる信仰、それが即ち科學の親で、又利用厚生の源泉である。大空想があつて始めて大發見がある。大理想が先驅になつて大事實が現れる。只々小發明小實利のみに汲々として、人の先蹤を追つて僅かな改良を施し、それで發明があると誇るのみでは、終に大實利を收めることは出來ないのである。(光あれ)

八 熊野落

太平記

(一) 護良親王のこと  
當時尊雲法親王と稱せらる。御年廿四。  
(二) 奈良市奈良坂にある。  
(三) 山城國相樂郡笠置山。

(四) 奈良興福寺の塔頭。

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されん爲に、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐れ御身の上に薄りて、大地廣しと雖も、御身ををさめらるべき處なく、日月明かなりと雖も、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻に千みて人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、何處とても御心安かるべき處なかりければ、かくても暫時はと思召されける所に、一乘院の候人按察法眼好專、如何して聞出したたりけん、五百餘騎を率ゐて、未明に般若寺へぞ寄せたりける。折節、宮に付き奉りたる人、一人もなかりければ一防



佛經の名。六百卷ある。唐の玄奘三蔵の譯したもの。

防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間スツマもなく、兵ツツ既に寺内にうち入りければ、紛れて御出あるべきかたもなし。さらばよし、自殺せんと思召して、既におし膚脱ハダヌスがせ給ひたりけるが、事協ワカはざらん期に臨みて腹を切らんことは、いと易かるべし。もしやと隠れて見ばやと思召しかへして、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃カウツ三つあり。二つの櫃ツツは、いまだ蓋を開けず。一つの櫃は御經を半ば過ぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋を開けたる櫃のうち、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に、御經を引きかづきて、隱形オンモヤウシユの咒を御心の中に唱へてぞおはしける。もし捜し出されなば、やがて突立てんと思召し

て、氷のごとくなる刀を抜きて、御腹にさし當て、兵ツツこゝにこそ、といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推量るもなほ淺かるべし。さる程に、兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下天井の上までも、残る處なく捜しけるが、餘りに求めかねて、これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開けて見よ。とて、蓋したる櫃二つを開けて、御經を取出し、底を翻して見けれども、おはせず。蓋開きたる櫃は見るまでもなしとて、兵皆寺中を出で去りぬ。宮は不思議の御命をつながせ給ひ、夢に道行く心地して、尙櫃の中におはしけるが、もし復兵立ちかへり、委しく捜す事もやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の捜し見たりつる櫃に入り替らせ給ひて



(二) 帝釋天の眷族で古來軍神として崇められた。  
(三) 十六の護法の善神。

ぞおはしける。案の如く、兵ども、また佛殿に立ちかへり、前の蓋の開きたるを見ざりつるが、覺束なしとて、御經を皆うち移して見けるが、からくとうち笑ひて、大般若の櫃の中をよく搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。と戯れければ、兵みな一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。是偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護にかゝれる命なり。と信心御肝に銘じ、感涙御袖を濕せり。かくては、南都邊の御隱家もかなひ難ければ、乃ち般若寺を御出ありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御伴の衆には、光林坊玄尊、赤松律師、則祐、木寺相模、岡本三河坊、武藏坊、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人なり。

\* 淡路の東岸にある。

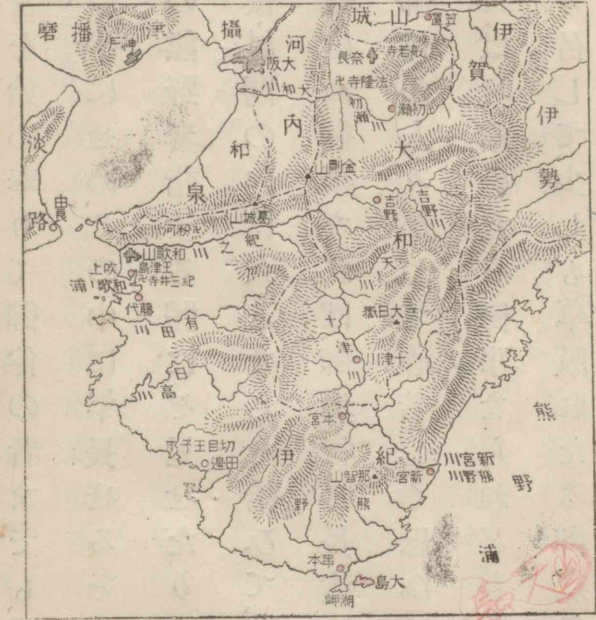
宮を始め奉りて御伴の者までも、皆、柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。この君もとより龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて協はせ給はじと御伴の人々かねて心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮、脚巾、草鞋を召して、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行遭ひける道者も勤修を積める先達も見咎むる事なかりけり。  
由良の港を見渡せば、澳漕ぐ船の楫をたえ、浦の濱ゆふ幾重



(一)(二)(三)(四)  
共に紀伊國海草  
郡に在る勝地。  
和歌の浦。  
吹上の濱。  
玉津島神社。

(五)  
唐の盧綸の詩に  
「孤村の樹色殘  
雨昏し、遠寺の  
鐘聲夕陽を送  
る。」とある。

とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と薄紫や藤  
代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に登け  
る玉津島、光も今はさらでだに長汀曲浦の旅の路、心を碎く



習なるに、雨を含める孤  
村の樹、夕べをおくる遠  
寺の鐘、あはれを催す時  
しもあれ、切目の王子に  
着き給ふ。  
その夜は、叢祠の露に御  
袖をかた敷きて、夜もす  
がら祈り申させ給ひけ

(一)  
熊野の本宮と新  
宮とをさす。

(二)  
本宮と新宮と那  
智とをいふ。

\*大和國吉野郡。



るは、傳へ承る、兩所權現はこれ伊弉諾伊弉册の應作なり。  
わが君その苗裔として、今朝日忽ちに浮雲のために隠され  
て冥闇たり。あにいたましからずや。玄鑿むなしきに似  
たり。神若し神たらば、君何ぞ君たらざらん。と五體を地に  
投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無  
二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗にはかられた  
り。  
終夜の禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫  
く御目睡ありける御夢に、鬘結ひたる童子一人來て、熊野三  
山の間は、尙も人の心不和にして、大義成りがたし。これよ  
り十津河の方へ御渡り候ひて、時の到らんを御待ち候へか



し。兩所權現より案内者に附けまゐらせられて候へば、御道指南仕るべく候ふ。」と申すと御覽ぜられて、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、たのもしく思召されければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、頓て十津河を尋ねてぞ分入らせ給ひける。

その道の程三十餘里が間には絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕を敷て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁、刀に削り、見おろせば、千丈の碧潭、藍に染めり。數日の間、かゝる嶮難を経させ給へば、御身もくたびれはて、流るゝ汗、水のご

とし。御足は缺け損じて草鞋皆血に染れり。御伴の人々もその身鐵石にあらざれば、皆飢疲れて、はかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し御手をひきて、路の程十三日に、十津河へぞ着かせ給ひける。

九 生命の直感

相馬御風

見るかげもない一本の樹でも、天候の工合により、季節の相違により、時刻の推移により、其の他種々な外界の變化によつて、實に複雑極る風姿の變化を呈する。私は先頃十日あまり病臥してゐる間に貧弱な自分の家の庭を毎日眺め暮して、しみじみ其の事實を味ふことが出來た。

\*  
名は昌治。  
文學者。



此の樹木の複雑極りない風姿の變化を毎日眺め暮して居る中に、私は何時となく植物にも一種の表情のあることを思はないでは居られなかつた。美しく晴渡つた大空の下に、飽くこと知らず輝しい太陽の光を浴びて居る時の樹木の表情、重苦しい様な雨に打たれて居る時の樹木の表情、嵐に揉まれて身悶えして居る時の樹木の表情、朝の光を受け、た時の樹木の表情、夕ぐれの闇に包まれようとする時の樹木の表情。何れも其の時々の特色ある氣分が、一ひらの葉一本の枝の上にも鮮かに表現されるのである。そして其の樹木の複雑な表情の變化は、それを眺めて居る私に向つて、沈黙のうちに無限の意味を語るやうに思はれるのである。

私は其の複雑多趣なる樹木の表情の變化に従つて、或時は高く、或時は低く、或時は軽く、或時は重く、私の情緒のリズムのさまざまな變化を経験することが出來た。そして其の複雑な情緒變化の節調を計り行くうちに、私の心全體がある一つの大きな力に吸収されて行くのを意識したのである。それは自分ながら驚かれるばかり嚴肅な力強い意識であつた。それは日常の生活に於て、殆ど経験する事の出來なかつた程の奇異なる大意識であつた。私は始めて生命そのもの、力を會得する事が出來たやうな氣がした。複雑多趣なる變化そのものを一貫した或一



種の靈妙なる其の意識、漠然として捉へ處が無いが、而も何物の力を以てしても冒しがたい嚴肅な生命の意識がそれであつた。その何とも知れぬ嚴肅な意識に於て、私は又「我」といふ一箇の存在と樹木といふ一箇の存在とがある説明しがたい作用によつて全然渾融しつくした事を語る事が出来る。即ちその場合に於ける樹木の表情は、同時に私そのものゝ表情であり、私そのものゝ表情はやがて樹木そのものゝ表情であつた。私は樹木と共に表情し、樹木は私と共に呼吸したのである。而して最後に躍動し來つた何とも知れず嚴肅なる生命の意識に至つて、私の眼はもはや樹木と私との別なく、全然ある一つの偉大な力に吸収され盡

した事を記憶する。

その刹那、寢て居た私は、我知らず起上つて、端然と靜坐した事も今に於てはなほ憚らず語り得る。それはほんの一瞬間の出來事でしかなかつた。併し私に取つては、實に――得難い嚴肅なる經驗であつた。私はその時位鮮かに生命そのものゝ力を感じた事はない。その時位鮮かに全意識の踊躍を感じた事は嘗てなかつた。病氣に苦しんで居る「我」の内に、何物によつても冒される事もない強大なる生命の活躍がある。その時位強烈にそれを感じたことは嘗てなかつた。

歡び、悲み、苦み。我が生活の風姿はその時々さまぐな



變化を経つゝあるが、その複雑多趣な風姿を一貫して黙々として流るゝ生命の流がある。日に照されゝば歡びの姿をあらはし、雨に打たれゝば悲みの思を表し、風に揉まれゝば苦悶の風姿を示す樹木の千姿萬態、しかもその複雑多趣なる生活の風姿を一貫して、嚴然たる統一を現すものは何であるか。曰くたゞ生き得るかぎり生きんとする生、伸び得るかぎり伸びんとする心これである。日に照されて居る時、雨に打たれて居る時は、たまた暴風に揉まれて居る時、彼等樹木の表に現す姿は種々に變つて居るが、其の様々に變る風姿を通じて、常にかの生き得るかぎり生きんとする發展がある。伸び得るかぎり伸びんとする心がある。闇

深く、雨烈しく、風凄じき夜に、今にも滅びんとする如き傷ましい呻き聲を立て、揉まれ苦しむ森の響、その慘澹たる響に怖れをなゝきつゝも、我々はなほ且その内に多くの樹木の生きんとする力、伸びんとする力の肅然たる運動を直観する事が出来る。あらゆる刹那あらゆる境遇を通じて、生きんとし、生けるものゝ體內には、黙々として流れて止まない生命の力がある。病苦はいかに重く我を壓して來るとも、運命はいかに意地悪く我に迫り來るとも、いや、更に、かの永劫の闇なる死が、よしいかに我に強く攻寄せて來る瞬間でも、我には我の生命力がある。何ものゝ威嚇イカリにも屈しない生命の力がある。死の影を眼前に凝視しつゝも、猶



且我々は飽くまでも主張すべき生の光明がある。私は貧しいわが庭に伸びつゝある二三本の樹木の生命と、私自らの生命との不可思議な渾融ムスヒを直觀し得た私は、突如として全體意識の上に一種の嚴肅な衝動を感じたのである。何とも云ひがたい生命觀に撲たれたのである。そして病苦にさいなまれつゝある「我」の奥に、何ものゝ力を以てしても動かすことの出来ぬ權威ある生命の活躍を直觀し得たのである。私は突如として起上つて、床上に靜坐したその刹那の嚴肅な歡喜の心は、實に私の未だ曾て經驗しなかつた所のものであつた。

賢明な世間の識者達は、或は私のこの告白を聞いて、その幼稚を笑ふかも知れない。併し、私は未だ曾て得なかつた此の經驗を、何としても告白せずには居られないのである。何となれば私の此の感激の印象にして、私の心内から消えない限り、私少くとも私一箇は決して再び「生命とは何ぞ」の愚問を繰返さないであらうから。

「生命とは何ぞ」今にして思ふに、これ位愚かな疑問がまたとあらうか。生命は只生命である。生命はたゞ直感によつてのみ把握することの出来る神祕沈黙な力である。生命の力に對する疑ぐらゐる、生命のない疑はない。直感と信仰、生命力を把握し得る道は此の二つより外にない。生命力の直感と信仰、私はそこから私の生活の根本動力を



得て來ようと思ふ。私の求むるところの宗教は、實にこの生命そのもの、直感を措いて外にない。私はこの生命そのもの、直感によつて、能ふかぎり生命そのものを讚美し、信仰し、高調して行きたいと思ふ。さうしてその讚美と信仰と隨喜とによつて、あらゆる自我の營みに不壞の權威と絶對の莊嚴とを加へつゝ、生きて行かうと思ふ。

あゝ、生命の力の直感。どす黒い病苦の裡に突如として私の全意識を躍動せしめたその刹那の感激は、今や何もの、權威を以てしても私の心から奪ひ去る事は出來ない。私は永久に此の感激をして、私のあらゆる營みの力の源たらしめたいと思ふ。(樹かげ)

10 嫁菜

元日や、はれて雀のものがたり。  
 憂きことになれて、雪間の嫁菜かな。  
 骸骨の上を粧うて、花見かな。  
 春の海、ひねもすのたり／＼かな。  
 長持に春かくれゆく衣がへ。  
 五月雨や、ある夜ひそかに松の月。  
 曇るなよ、名は末代の秋の月。  
 牛叱る聲に鳴たつゆふべかな。  
 化物の正體見たり、枯尾花。

服部 嵐雪  
 捨 女  
 上島 鬼貫  
 谷口 蕪村  
 井原 西鶴  
 大島 蓼太  
 杉田 望一  
 各務 支考  
 横井 也有



旅に病んで、夢は枯野をかけまはる。

松尾芭蕉

來年はくくと暮れにけり。

澤露川

二 音樂

試みに一曲の歌謠を聽け。吾人は之によりて得る感興に二箇の要素あるを發見すべし。一は其の歌謠の意義が我が心を動かすものにして、一は其の音樂の高低緩急抑揚強弱、概言すれば、其の曲節が我が情を刺衝するものなり。されど歌謠をなせる言語の意義は、文字は寫して、目之を見るも、またよく之を解するを得。其の音樂的要素にあらざるや、論なし。されば歌謠のよく音樂たるは、一に其の音聲の

音樂とは音聲と  
器樂とは音聲と

曲節に存すること明かなり。而して曲節は言語より其の意義を除去したる聲音の上にある。かく言語をなさざる聲音は、即ちまた器樂の依つて立つ所以の基礎なり。吾人は固より聲音其のものに一種の快美を感じ。是恰も色彩其のものを見て喜ぶと同じ。一つの音が耳に快にして、他の音が耳に不快なるは、是がためなり。されど、吾人は別にこの感覺的快美の感より、進んで其の音聲に何等かの表象あるを感ずるなり。其の或は高く昂り或は低く沈み、或は悠揚として長く、或は急迫にして短き、一々皆吾人の心情と相應ずるにあらざるはなし。吾人は且く之を名づけて情を含める聲音といはん。この聲音は、人々みな其の軌



を一にして互に扞格することなきが故に、吾人は耳に他人の聲音を聽いて心直ちに之に感應し敢て謬ることなし。而して此の如き關係は、廣く之を推してあらゆる聲音に及すを得べし。蟲吟鳥語の如き松韻濤聲の如き、若しくは、金石相撃ち、風絃相鳴るが如き、自然界の聲音に對し、人の之を聽いて或は泣き或は笑ふは、皆是と理を同じうす。畢竟、言語をなさざる音聲に、吾人の心情の表徴あるなり。器樂の根本原理は實にこゝに存す。器樂は此の如き音聲の醇なるものを選び粹なるものを取りて、所謂樂音といふものを定め、絲竹管絃を假りて之を出さしめ、藝術に必須なる形式を之に附與して、複合構成せしものなり。而して、其の資料

\*オーケストラの一形式。

たる音聲と之を構成する形式とは、皆吾人の情生活と相應じて、一々其の表徴たるものならざるはなし。月夜にふきすさぶ一管の笛聲より、シムフォニーの大絃樂曲に至るまで、人の之を聽いて或は泫然として涙を流し、或は肅然として襟を正し、或は心神朗徹、遠く塵寰を脱して直ちに天地と冥合する感を生じ、或は煩悶懊惱、苦腸九廻する思をなし、我と樂と融合一致して、樂聲の入つて我が心情となれるか、はた、我が心情の化し去つてかの樂聲となれるかを疑ふに至るもの、其の源は實にこゝにあり。要するに、器樂の樂聲は人の情の聲なり、人心の最奥處に潛める神祕なる琴線の動ける反響なり。



されど、言語をなさざる音聲は特殊の意義を有せざるが故に、器樂の表象する感情は一般的抽象的たるを免れず。例へば、こゝに悲哀の情を託せる一曲ありて、吾人之を聽いて嗚咽するを禁ずる能はずとせん。樂曲の效果は是にて足るかは、吾人遂に之を知ること無し。歡喜平靜苦悶、凡て皆此の如し。器樂のあらはすところは、特殊の人が特殊の境遇に於ける特殊の感情にはあらざるなり。若し、此の如き感情の表象を望まば、吾人は之を言語に要めざるべからず、之を詩歌に要めざるべからず。

更に他の方面より之を見ん。人の感情は境によりてあらはれ、自然界の現象に應じて變化す。春和景明、風暖かに霞たなびき、小川の流緩うして岸邊の柳絲なり。人この光景に對すれば、氣暢び心ゆるやかにして、われまた雙肩胡蝶の翼に化し、翩々としてかの菜花に戯れんとする思あり。器樂はよくこの心神快暢の感をあらはすを得ん。されど、其の霞のたなびける狀、小川の流るゝ狀、もしくは、春風のゆるやかに柳條を梳る狀をばうつす能はず。此の如き敘述は、また之を言語に要めざるべからず、之を詩歌に要めざるべからざるなり。

是に於てか、聲樂あり。聲樂は言語をなせる人聲即ち歌詞に旋律ある曲節を附せるものにして、詩歌と音樂との結合



せるものなり。〔音楽通解に據る〕

三 敦盛の最期

平家物語

元暦元年二月七日。  
攝津國武庫郡。平軍の據つて搦手とした處。今の神戸市の西部にある。

ざる程に、一の谷の軍敗れしかば、武藏國の住人熊谷次郎直實、平家の公達の助船に乗らんとて、汀の方へや落ち行き給ふらん。あつばれよき大將軍に組まばや。と思ひ、細道にかかつて汀の方へ歩まする所に、茲に、練貫に鶴縫うたる直垂に、萌黄にほひの鎧着て、鍬形打つたる兜の緒をしめ、黄金づくりの太刀を佩き、二十四挿いたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓持ち、連錢葦毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乗つたりける者一騎、沖なる船を目かけ海へさつと打入り、五六段ばかりぞ

泳がせける。

熊谷あれはいかに、よき大將軍とこそ見まゐらせて候へ。

正なうも敵に後を見せ給ふものかな。返させ給へ。と扇を揚げて招きければ、招かれて取つて返し、汀にうち上らんとし給ふ處に、熊谷波打際にて押並べ、むずと組んで、どうと落ち、取つて押へて首をかゝんとて、兜をおし仰のけて見たりければ、薄假粧して鐵漿黒なり。我が子の小次郎が齡ほどして十六七ばかりなるが、容顔まことに美麗なり。「そもそも如何なる人にてわたらせたまひ候やらん。名のらせ給へ。助けまゐらせん。」と申しければ、まづかういふ和殿はたそ。「物その數にては候はねども、武藏の國の住人熊谷

\*直家。



の次郎直實。」と名のり申す。「さては、汝がためには好い敵ぞ。名のらずとも、首を取つて人に問へ、見知らうずるぞ。」と宣ひける。

熊谷「あつばれ、大將軍や。此の人一人討ち奉つたりとも、負くべき軍に勝つべきやうなし。又、助け奉つたりとも勝つべき軍に負くることもよも有らじ。今朝、一の谷にて、我が子の小次郎が薄手負うたるをだにも、直實は心苦しく思ふに、此の殿討たれ給ひぬと聞き給ひて、さこそは歎き悲しみ給はんずらめ。助けまゐらせん。」とて、後を顧みたりければ、土肥梶原五十騎ばかりで出で来る。熊谷涙をはら／＼と流して、「あれ御覽候へ。いかにもして助けまゐらせんとは

次郎直實平。  
平三景時。

存じ候へども、味方の軍兵雲霞の如くに満ち／＼て、よも遁しまゐらせ候はじ。あはれ、同じうは直實が手にかけて奉つて、後の御供養をも仕り候はん。」と申しければ、「たゞ如何様にも疾う／＼首を取れ。」とぞのたまひける。

熊谷餘りにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺えず、目もくれ心も消えはて、前後不覺に覺えけれども、さてしも有るべき事ならねば、泣く／＼首をぞ搔いてける。「あはれ、弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、何しに只今かゝる憂目をば見るべき。情なりも討ち奉つたるものかな。」と、袖を顔に押當て、さめ／＼とぞ泣き居たる。



首を包まんとて、鎧直垂を解いて見ければ、錦の囊に入れられたりける笛をぞ腰にさゝれたる。「あな、いとほし。この曉城の内にて管絃し給ひつるは、此の人々にておはしけり。當時、味方に東國の勢何十萬騎か有るらめども、軍の陣に笛持つ人はよもあらず。上臈はなほも優しかりけるものを」とてこれを取つて大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば、修理大夫經盛の子、大夫敦盛とて、生年十七にぞ成られける。それよりしてこそ熊谷が發心の心は出できにけれ。

義經。

平忠盛の子、清盛の弟。

三 扇の的

平家物語

元暦二年二月。

さる程に阿波讚岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの峯、この洞より、十四五騎二十騎打連れ、馳せ來るほどに、判官程なく三百騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ。勝負を決すべからず。とて源平互にひき退く所に、沖より尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横さまになす。「あれは如何に」と見るところに、船の中より、年の齡十八九ばかりなる女房の柳の五つ衣に紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを船のせがいに挟みたて、陸へ向つてぞ招きける。

表白裏背。

檢非違使尉義經。

判官後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに」とのたまへば、射よとにこそ候らめ。たゞし、大將軍の、矢面に進んで傾城を



紺(二)の濃い色。

袖(三)のさき袖口の方(三)に更に半幅(三)のものを(三)つぎ足したのをいふ。  
緒(三)をとほす金具を銀(三)で作つた太刀。

\*(二)鹿の角で作つた鏡。

御覽ぜられんところを、手だれにねらうて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候らん。と申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かある。と問ひ給へば、手だれども多く候なかに、下野國(ニ)の住人、那須太郎(ナ)資高(ス)が子に與一宗高(ウ)こそ小兵(ス)にては候へども、手はきいて候。と申す。判官、證據があるか。「さん候。かけ鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落し候。と申しければ、判官、さらば、與一呼べ。とて召されけり。  
與一、その比は、まだ二十許りの男なり。かちんに赤地の錦を以ておほくび(三)はたそでいろへたる直垂(チ)に、萌黃威(モ)の鎧(カ)きて足白(ス)の太刀(タ)を佩(ハ)き、二十四挿(サ)いたる切斑(キ)の矢負(ヤ)ひ、薄切斑(ウ)

に鷹の羽割合せてはいたりけるぬための鏡(カ)をぞさし添へたる。滋籐(シ)の弓脇(ユ)に挟み、甲(カ)をば脱いで高紐(タ)にかけ、判官の御前に畏る。

判官、いかに、與一。あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし。と宣へば、與一、仕つつとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、ながき味方の御弓矢の疵にて候べし。一定仕らうずる仁に仰せつけらるべうもや候らん。と申しければ、判官、大いに怒つて、今度、鎌倉を立つて西國に向はんずる者どもは、皆義経が下知を背くべからず。それに、少しも子細を存ぜん人々は、これより疾うく鎌倉へかへらるべし。とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけ



\*やどり木の上  
に鳩二つ飛んで  
る様をいふ。

ん、さ候はゞ、外れんをば存じ候はず。御説おとで候へば、仕つてこそ見候はめ。とて、御前をまかり立ち、黒き馬の太く逞しきに、まろほやすつたる金覆輪アケリの鞍置いて乗つたりけるが、弓取直し、手綱かいくつて、汀へ向ひてぞ歩ませける。御方の兵ども、與一が後を遙かに見送つて、此の若者、一定仕らうずるとおぼえ候。と申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。矢ごろ少し遠かりければ、海の中一段許り打入れたりけれども、猶扇のあはひは七段許りもあるらんとこそ見えたりけれ。

比は二月十八日、酉トの刻許りのことなるに、折節、北風烈しう吹きければ、磯打つ浪も高かりけり。船はゆり上げ、ゆりすゑ、たゞよへば、扇も串くしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す、陸くわには源氏くつばみを並べてこれを見る。何れもく、晴ならずといふことなし。與一目を塞いで、南無八幡大菩薩、別しては、わが國の神明、日光の權現、宇都宮那須の湯泉大明神。願はくは、あの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切折り、自害して、人に再び面を向くべからず。今一度本國へ歸さんと思召さば、この矢はづさせ給ふな。と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

與一、鏑ハツクを取つて番ツバひ、よつ引いて、ひようと放つ。小兵とい



ふでう、十二束三つ伏せ弓は強し、鏑は浦響く程に長鳴りして、過たず、扇の要きは一寸ばかり置いて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へあがりける、春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家舷を敲いて感じたり、陸には源氏籠をたいてどよめきけり。

四 七夕の空を仰ぎて 新城新藏

天文に關する古傳説は、東西とも其の數に乏しくないが、其の中でも牽牛織女の物語は特に異彩を放つて居る。この

\* 天文学者。  
理学博士。  
京都帝國大學教授。

話は少くとも今より約三千年の昔に支那に起つたものであらう。やがて文明の東漸と共に我が國にも傳はつたもので、爾來和漢の文學を美はしく彩つて居り、普く人口にも膾炙して居る。

陰曆七月七日の夕べ、上弦の月は南方天の河の下流にかゝつて居る。仰いで天空を望めば、薄明るく南北に走れる天の河の兩岸に接して、二つの大星が青白き光を放つて相對して居る。我の心を以て彼を推せば、天上の二星も亦この良夜に當り、河を渡りて相會せんと欲して居るのであらうと思はれる。此の心神に通じ、折柄飛び來れる鵲は群をなして河を填め、忽ちにして橋を成したと見たのがこの話の



始であらう。

萬葉集の歌は素樸ソボクにしてよく古傳説の趣を傳へて居る。

秋風のさやけき夕べ、天の河

船こぎわたる月人男。

秋風夕べの河  
船こぎわたる月人男

天の河霧立ちのぼる、棚ばたの

雲の衣のかへる袖かも。

この話を正面より見れば、荒唐無稽の物語に過ぎざること  
は言ふまでもない。牽牛星と織女星とは共に恆星であつ  
て、肉眼に見ゆる程度に於ては、永久其の相互の位置を變ず  
ることがない。牽牛星は我が太陽の十四倍、織女星は九十  
五倍の光を發し、其の間の距離は一方より發したる光が他

の一方に達するまでに約十六年を要する程である。斯の  
如き恆星が其の數約十億以上、廣袤約一萬光年の空間に相  
集つて我が星辰界を形成して居るので、所謂天の河といふ  
のはこの星辰を其の遠く廣がれる方向に面して見た光の  
集積に外ならぬ。

併しながら牽牛星・織女星は人に非ず、天の河は川に非ざる  
が故にこの物語は一顧の値なき架空談なりとして排斥し  
去るのは、餘りに無情であると言はなければならぬ。我が  
邦の文學に精通し、廣くこれを世界に紹介したるラフカデ  
オ、ハーン氏は、其の「銀河ローマンス」といふ小冊子に於て萬  
葉集にある七夕の歌を集めて之を翻譯し、解説して居るが、



更に其の優麗なる才筆を以て深く是等の歌人に共鳴し、我  
我と雖も一たび塵界の喧騒を離れて星斗燦然たる大空に  
對し、遠く思を天外に馳すればいつしか現代天文学の教ふ  
る所を超越し、天の河を漕ぎ行く船の櫂の棹に聞き惚れる  
に至るであらうと述べて居る。これは誠に同感であるが、  
私は更に一步を進めて、この物語に現代天文学より見たる  
新生命を與へて見たいと思ふ。天に見ゆる無数の星は皆  
一つ／＼我が太陽に比類すべき程のもので、其の數約十億  
以上も集つて天の河の方面に扁平狀に廣がれる所謂銀河  
系といふ一の集團をなして居るのであるが、この集團は決  
して偶然雜居せる烏合の衆ではない、物質相互の間には常

に強大なる引力が作用して居るのでこの相互引力のため  
に我が星辰界は永久崩れざる一の恆久的團體をなして居  
るのである。

我々に光と熱とを與へ、地上に於ける殆ど一切の活動の根  
源となつて居る太陽のエネルギーも、其の起りは宇宙引力  
のための密集である。一つ／＼我が太陽と比類すべき無  
数の恆星の光も亦同様である。要するに天地宇宙の成立  
して崩れざるものも、又其の間に光明あり活動があるのも、  
皆すべて宇宙引力のためである。星辰の大集團を以て人  
間の社會的集團に比し、天體間の相互引力を以て人間相互  
の愛に比するのは、必ずしも無理な比較ではあるまい。牽



牛織女の物語は天地宇宙成立の基礎なる宇宙引力の存在を語るものとは解し得ないであらうか。

我が天地宇宙が如何にして成立するに至つたか、天地開闢の始りは如何と云ふ問題に就いては古來種々の説があつて未だ一定するに至らないが、私の考では、これも亦全く宇宙引力の賜に外ならぬ。我が太陽系の如きは其の始め幾億萬となき無数の流星より成れる尨大なる集團であつたものが、内部相互の引力のために次第に密集し、中央に大なる集團を成せるものは太陽となり、少しく離れて局部的集團をなせるものが木星や地球となつたものである。太陽は大なる集團なるが故に發生せる熱量も多く、非常に

高温度の瓦斯體状のものとなり、多量の光熱を四方に發散し、光明赫耀アハエラウとして居るが、地球の如きは小なる集團なるが故に發生せる熱も少く、出來始めには全部液體である程の温度であつたらうが、早く既に冷却して其の表面は生物の發展するに適する様になつてゐるのである。

斯くの如き系統の出來始めには太陽のまはりに或は右廻りのもの、左廻りのもの、或は彗星的軌道を畫くものなど、種種雑多の運動をなし、従つて衝突や干涉などは頻繁シバシバにあつたことは勿論であらうが、其の間にも各個體の間には常に強大なる相互引力が働いて居つたがために、永き時の間に是等の運動は次第に整頓し、今日見る如き秩序整然たる太



陽系となつたものである。

要するに我々が現に見る如き天地宇宙が成立するに至つた根本の動機は宇宙引力の爲である。常に相集<sup>ツク</sup>聚<sup>ル</sup>せんとするのは物質根本の性質で、この性質あるが爲に萬物は存在し、天地宇宙も存在するに至つたと云ふべきである。思ふに仁と云ひ、愛と云ひ、慈愛と云ふ、仁愛の心は人間本來の性であつて、これあるがために大小種々の人間社會は現在の如くに成立するに至つたのであらう。進化の道程に於ては或は利害の相反する所、衝突鬭争の頻<sup>ヒ</sup>發するの固より止むを得ないことであらうが、永き時の間には相互仁愛の念の導く所により、遂に圓滿無礙の整然たる理想郷に

向つて進化するのではあるまいか。

古人の考は、牽牛星と織女星とをして相引かしめんとしたが、現代の天文学より見れば、我が天地宇宙は引力によつて成立して居るが故に、かゝる法則を認むる人の心と心とは相引くものでなければならぬと云へる。畢竟物心不二、盡く皆永遠の平和を期して進化し行くものであらう。

三千年前の素樸なる古傳説は星を以て人とし、人を以て星とし、天地を包<sup>い</sup>容<sup>む</sup>せる人間の大理想を語るものと解釋し得るではあるまいか。(科學知識)

### 一五 花のやど



野遊 ツバモ  
那ねのらふ

播磨家隆 フミノウシノヘノカ

オモウドクソコトモシラズニキレカ  
花のやど

花のやど ハナノヤド  
花のやど

花のやど ハナノヤド  
花のやど

花のやど ハナノヤド  
花のやど

夏月 ナツキ  
夏月をよめる

源頼政 タケノサカ

夏月 ナツキ  
夏月をよめる

夏月 ナツキ  
夏月をよめる

夏月 ナツキ  
夏月をよめる

夏月 ナツキ  
夏月をよめる

夏月 ナツキ  
夏月をよめる

夏月 ナツキ  
夏月をよめる

夏月 ナツキ  
夏月をよめる

夏月 ナツキ  
夏月をよめる

夏月 ナツキ  
夏月をよめる

夏月 ナツキ  
夏月をよめる











今のやうに思はるゝを、今年は門火に迎へられたま  
 ひ御魂祭の棚のうへにみそ萩の露手向けられ給ふ  
 らん御事思へば猶夢のやうに御座候。多くもおは  
 しまさで、唯二人なる御中、あけくれにお睦まじう他  
 處目羨ましくいらせられしを、賑かし御思ひ出でく  
 さ様々にて慰め難ういらせられ候はん、いとゞ御思  
 ひや勝るとたゆたひながら、ありし名残の蓮の花一  
 もともたせ差出候、御供へ下さらば忝く候。籠の  
 中なるものは今朝始めて畑よりとりたるに御座候。  
 同じう御覽に入れたく候。かしこ。(一葉全集)

(二) 名古屋藩士。俳  
 人。俳文家。天  
 明三年歿す。

(三) もし鳴かば蝶々  
 籠の苦を受けん

(四) 莊周が夢に胡蝶  
 と化したこと。

(五) 莊子にある。

(六) 花に鳴く露水に  
 すむ蛙の聲をき  
 けばいとしい  
 けるものいづれ  
 か歌をよまざり  
 ける。

(七) 古池や蛙とびこ  
 む水の音。

(八) 芭蕉翁。

一七 百蟲譜

横井也 有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものゝ限なるべし。それ  
 も啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ尙めでた  
 けれ。さてこそ莊周が夢も、このものには託しけめ。  
 蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこ  
 そ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるは、よし。古  
 池に飛んで翁の目をさましたれば、この物の事さらにも謗  
 りがたし。  
 蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日  
 ざかりに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば、初  
 蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、このものばかり初蟬とい



(一) やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲。(芭蕉)

(二) 車胤は貧しくて常に油を得ず。夏月數十の螢を練囊に入れ、その明りて書を讀んだとこと。

(三) ほとぎすのこ。蜀の望帝の魂魄化してほととぎすになつたといふ傳説がある。

はるゝこそ大いなる手柄なれ。やがて死ぬけしきは見え  
ず。とこのものゝ上は、翁の一句に盡きたりといふべし。  
螢はたくふべきものなく、景物の最上なるべし。水に飛び  
かひ草にすだく。五月の闇はたゞこのものゝ爲にやとま  
でぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代にせ  
られたるは、このものゝ本意にあらざるべし。  
日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎ  
て、夕べは草に露おく頃ならん。つくづくほふしといふ蟬  
は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死にて、この  
ものになりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲に  
叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛は巧みに網を結んで潜つて物を害せんとす。ひとへ  
に奸賊の心ありて、いとにくし。さはいへ、廢家の荒れたる  
軒に蟬の羽など懸け捨てたるは、聊かあはれ添ふる折もあ  
らんか。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲はたがために身をこが  
すにか。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は物ず  
きの謗となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。  
蟻は明暮にいそがしく世の營に隙なき人に似たり。東西  
に聚散し、餌をもとめて、やまず。いつか槐安の都を遁れて、  
その身の安き事を得ん。さはれ、たよりあしきかたに穴を

(一) 蓼くふ蟲もすきずき。

(二) 淳于棼が夢に大槐安國に入り王に見えて南柯郡の守となり二十年を経て送り出されたを見て、夢がさめ、古き槐の樹の下を尋ねた所蟻穴があつたといふ故事がある。



蟻螂斧を擧げて  
龍車に當るとい  
ふ古語である。

駿河國駿東郡原  
町。  
駿河國富士郡吉  
原町。

營みて、千丈の堤を崩すべからず。  
蝸牛は只水に在るべきもの、いかで草葉に遊ぶらん。家も  
ちたれども行く先々を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。  
蛇蚯蚓の足なくとも歩くべくば、蜈蚣をさむしの數多きは  
不用の事なり。

蟻螂の瘦せたるも斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。  
人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩にたとふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕籠  
にのりて富士を眺めゆく人には似たり。

促織鈴蟲響蟲はその音の似たるを以て名によべり。松蟲  
のその木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならん。

毛生ひむくつけき蟲にも同じ名有りて、松を枯し人にうと

まる。一つ在所に、二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、

一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きりくすのつゞりさせとは、人のために夜寒を教へ、藻に

住む蟲はわれからと、只身の上を歎くらんを、蓑蟲のちよ

と呼ぶは、母をば慕はずして、など父をのみ戀ふらん。

蚊は憎むべき限ながら、さすが、卯月の頃、端居めづらしき夕

べ、始めてほのかに聞きたらん、又は、長月の頃、力なく残りた

るは寂しきかたもあり。蚊屋釣りたる家の様蚊遣焚く里

の煙などかつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげ

しきを、かの七賢の夜咄にはいかに團扇の隙なかりけん。

秋風にほころび  
ぬらし藤ばかり  
つゞりさせふ  
きりくす鳴く  
（古今集）  
あまのかる藻に  
すむ蟲のわれか  
らとねをこそ泣  
かめ世をば恨み  
（古今集）  
みの蟲いとあは  
れなり鬼の生み  
ければ親に似て  
きこちぞあらし  
とて心のあしき  
きぬひききせて  
折に秋風の吹か  
待てよといひて  
逃げていづる  
もしらす風の音  
聞きしりて八月  
ばかりになれば  
かなげなくとい  
みじう哀なり  
（枕草紙）  
竹林七賢のこと  
晋の阮籍・嵇康・  
山濤・向秀・劉伶  
・王戎・阮咸をい  
ふ。



(鶉衣)

後鳥羽院。

(承久三年五月二日)

義時と泰時

増

鏡

さても院の思し構ふることしのぶとすれど、やうく漏れ  
 きこえて、ひがしざまにもその心づかひすべかめり。あづ  
 まの代官にて、伊賀判官光季といふものあり。かつく彼  
 を御勤じのよし仰せらるれば、御方に參る兵ども押寄せた  
 るに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。「まづいとめでた  
 し。」とぞ院は思召しける。あづまにも、いみじうあわてさわ  
 く。「さるべくて、身のうすべき時にこそあなれ。」と思ふもの  
 から、討手の攻め來りなん時に、はかなきさまにて屍をさら

承久三年五月二  
十一日のこと。

さじ。おほやけと聞ゆとも、みづからしたまふことならね  
 ばかつは我が身の宿世をも見るばかり、と思ひなりて、弟の  
 時房と泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞の兵をたな  
 びかせて都にのぼす。

泰時を前にすゑていふやう、「おのれをこのたび、都に參らす  
 るは思ふところ多し。本意の如く清き死にをすべし。人  
 にうしろ見えなんには、親の顔また見るべからず。今をか  
 ぎりと思へ。賤しけれども、義時君の御爲にうしろめたき  
 心やはある。さればよこさまの死にをせんことはあるべ  
 からず。心をたけくおもへ。おのれ打勝つものならば、再  
 びこの足柄箱根は越ゆべし。」など泣くくいひきかす。「誠



にしかなり。また親の顔拜まん事もいと危し。と思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。かたみに今やかぎり、とあはれに心細げなり。

承久三年五月二十三日。

かくて、打出でぬるまたの日、思ひかけぬ程に、泰時唯一人鞭を揚げて馳せきたれり。父、胸打騒ぎて、「いかに。」と問ふに、軍のあるべきやう、大方の掟などは、仰のごとくその心を得侍りぬ。もし、道のほとりにも、圖らざるに、忝く鳳輦を先だてて、御旗をあげられ臨幸の嚴重なる事も侍らんに参りあらば、その時の進退いかゞ侍るべからん。この一事を尋ね申さんとて、一人馳歸り侍りき。といふ。

義時とばかり打案じて、「かしこくも問へるをのこかな。そ

のことなり。まさに君の御輿にむかひて弓を引くことは、いかゞあらん。さばかりの時は、兜をぬぎ、弓の弦をきりてひとへにかしこまりを申して、身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなから、軍兵をたまはせば、命を捨て、千人が一人になるまでも戦ふべし。と言ひもはてぬに、急ぎ立ちにけり。

元 東路の旅

東 關 紀 行

仁治三年の秋八月十日あまりのころ、都を出でて吾妻へ赴く事あり。まだ知らぬ道のそら、山重なり江重なりて、はるばる遠き旅なれども、雲を凌ぎ霧を分けつゝ、しばしは前途

四條天皇の御代



の極りなきに進む。終に十餘りの日數を経て鎌倉に下り  
着きし間、或は山館野亭ヤマノヤシロの夜のとまり、或は海邊水流のかす  
かなる砌ミサキに至る毎に、目に立つ處々、心とまる節々を書きお  
きて、忘れずしのぶ人もあらば、おのづから後の形見にもな  
れとてなり。

逢坂の關の清水  
に影見えて今や  
引くらん望月の  
駒。(紀實之)

遊子猶殘月ニ行  
キ、函谷雞鳴ク。  
(賈島)

世の中はとて  
かくても過して  
ん宮も薬屋もは  
てしなれば。  
(蟬丸)

東山の邊なる住家を出でて逢坂の關打過ぐる程に、駒引渡  
る望月の頃もやうく、近き空なれば、秋霧立渡りて、深き夜  
の影ほのかなり。ゆふつけ鳥かすかに音づれて、遊子なほ  
殘月に行きけん函谷ヤンゴクの有様、思ひ出でらる。昔、蟬丸といひ  
ける世捨人、この關の邊に葦屋アシヤの床を結びて、常は琵琶をひ  
きて心を澄し、大和歌を詠じて懷オモヒを述べけり。嵐の風の烈

しきをわびつゝぞ過しける。

いにしへのわらやの床のあたりまで、

こゝろをとむる逢坂のせき。

關山をすぎぬれば、打出濱粟津原アハツハなど聞けども、未だ夜のう  
ちなれば、さだかにも見えわかず。昔、天智天皇の御代大和  
の國飛鳥トビトリの岡本宮より近江の志賀の郡に都遷ありて、大津  
宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞか  
しとおぼえてあはれなり。

さゝ波や大津の宮のあれしより

名のみのこれる志賀の故郷。

曙の空になりて、勢田の長橋打渡すほどに、湖遙かにあらは

三十一  
大和國高市郡高  
市村。







唐の白樂天の詩  
に遺愛寺ノ鐘  
ハ枕ヲ敬テ、聽ク

ふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなる床の秋風、夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心ちす。枕に近き鐘の聲曉の空に音づれてかの遺愛寺の邊の草の庵イハレの寐覺ニヤヤムもかくやありけん、とあはれなり。行末遠き旅の空思ひつゞけられて、いといたる物悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だに

かたしきわびぬ、とこのあき風。

この宿を出でて、笠原の野原打通るほどに老蘇オウソ杜トといふ杉村あり。下草ふかき朝露の霜にかはらん行末も、はかなく移る月日なれば、遠からずおぼゆ。

かはらじな、わがもとゆひにおく霜も、

名にしおいそのもりの下草。

音に聞きし醒が井を見れば、蔭暗き木の岩根より流れ出づる清水、あまり涼しきまで澄渡りて、實に身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざるほどなれば、往還の旅人多く立ちよりて涼みあへり。かの西行\*が道のべに清水流るゝ柳かげ、しばしとてこそ立ちどまりつれ。と詠めるも、かやうの處にや。

道のべの木蔭の清水むすぶとて、

しばしすゝまぬ旅人ぞなき。

柏原といふ處をたちて美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底におとづれ、嵐松の梢にしくれわたりて、日影も見え

鎌倉時代の歌人



藤原長經。  
人すまぬ不破の  
關屋の板びさし  
荒れにし後はた  
だ秋の風。

三五夜中

水の面に照る月  
浪をかぞふれば  
こよひぞ秋の最  
中なりける。  
(拾遺集)

三五夜中

新月也  
丁丑の夜中の月

二千里外の人心

ぬ木の下道あはれに心ほそし。越えはてぬれば、不破の關  
屋なり。萱屋の板びさし年經にけりと見ゆるにも、後京極  
攝政殿の荒れにし後はたゞ秋の風とよませたまへる歌思  
ひいでられて、この上は風情もめぐらしがたければ、賤しき  
言の葉を遺さんもなか／＼におぼえて、此處をば空しく打  
過ぎぬ。

株瀬川といふ處にとまりて、夜ふくる程に、河端に立出でて  
見れば、秋の最中の晴天清き河瀬にうつろひて、照る月なみ  
もかす見ゆるばかり澄渡れり。二千里の外の故人の心、遠  
く思ひやられて、旅の思いとゞおさへ難く覺ゆれば、月の影  
に筆を染めつゝ、花洛を出でて三日、株瀬川に宿して一宵。

しば／＼幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつ／＼遠情  
を前途一千里の雲に送る。など、ある家の障子に書きつくる  
ついでに、  
知らざりき、秋のなかばの今宵しも、  
かゝる旅寝の月を見んとは。

二〇 千客萬來

「千客萬來」皆來ると、困るなり。  
雪隠へ先を越されて、月をほめ。  
源左衛門、鎧を着ると犬が吠え。  
紹のはおり、螢が着るとしまひなり。



藥禮の時は、こつちで匙かげん。  
太平の世は兵法もはらごなし。  
片假名に四角な文字は手を引かれ。

三 秋の力 式驗 綱 島 梁 川

あれこれをあつめて霞む春の朧を人生の夢とも見ば、秋は直にこれ覺醒なり、事實なり。蔦紅葉の中より露れ出づる節くれだちし樹身、枯芝生の底より躍り出づる偃蹇たる雲根、何れか秋は人に迫る事實たらざる。  
中にも秋の力を最も強く膽かに言出づるものは黄柚なり、赤柿なり。一美術家語りて曰く、吾嘗て終日秋を郊外に探

名は榮一耶。  
倫理學者。  
明治四十年歿す  
年三十五。  
あれこれを集めて春は朧かな。  
(芭蕉)

與謝氏。  
俳人。畫家。  
天明三年歿す、  
年六十七。  
酒井氏。  
畫家。  
文政十一年歿す、  
年六十八。

りて秋に會はず、歸路會夕空鮮かに生り出でたる赤き柿の實の累々たるを見て、始めて秋こゝにありと叫びき。と。げにも秋の姿をさながらに具象にして描き出せるものありとせば、それは碧落の空に躍如として生り出でたる赤柿を描きてはまたとあらじ。秋は實に此の累々たる赤柿に其の全幅の表現を得たる趣あるに非ずや。その昔蕪村抱一などの畫家が寥々たる此の一物に大膽なる落想をこめて、一幅の秋のこゝろを勁く隈なく淋漓揮灑し出せる詩眼流石に凡にはあらざりけり。  
見よ、秋の潭に淵黙の智あり、秋の空に剛明の象あり。月は清輝を帯び、星に聲あり。落葉にうづもる、枯井の水、猶鬚



眉を鑑すべく、夢を歌ふ満園の蟲しぐれ、人の深省を誘ふ。空際ははやかに走る波濤の山、極目鮮かにくねる一河の帶、樹間の聲の錚々として勁き、天籟地籟の砰湃として厲しき、あはれ秋の萬象、何物かすべてこれ透明照徹、剛克雄健の一氣を以て貫かざる、何物かすべてこれ哲人の雄姿、道士の風岸を以て人に迫らざる。秋は夢に非ずして事實なり。人は秋に立つて直ちに事實と面相接するなり。

秋は何等の天文地采の形式を藉らざる裸體のまゝなる思想なり。そは如々なり、故に明瑩なり、澄徹なり、而して又充實なり、豐贍なり。春草の紗、夏木の衣、すべて名殘なく脱ぎすて、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くもまた雄々しき

丈夫神の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。若し秋に一味の文采ありとせば、白蘋紅蓼の裳裾、蘆花淺水の帶、桔梗刈萱尾花が波の袂も、輕き姿なるべし。あはれ其の澹如たるすゞしさは、彼の哲人、道士の婆娑たる一衣の高風にも似たるかな。至竟秋の力は、其の衣にあらずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。(病間録)

\*名は雄二郎。哲學者。文學博士。

三 晚節

三 宅雪嶺

古來人の春花を引いて譬喩するもの多し。梅花の寒を凌ぎ、雪を冒し、玉肌芳香を放ちて、而して散り去る、いはゆる魁けてこそ色も香もあれといふ類なり。されど秋葉の丹化



し、綉を纂め、錦を綴り、璀璨として目を眩し、然る後飄零して  
 擧げて一空に歸するも、亦頗る見るべからずとせず。之を  
 人事に喩ふるに、少壯事を起し、險を冒し、一敗して命を殞す  
 は悲惨悽愴、人をして哀を催さしむるも、年既に老い、經歷あ  
 り、功勞ある身にして、尙發憤事を擧げ、運命に安んじて、從容  
 生を授くるは、他の感を惹くこと一層深きことあり。

\*諸葛亮。  
 蜀漢の丞相。

孔明<sup>\*</sup>明年二十七、出でて三分の計を畫し、奇策縱橫謀る所成り、  
 成る所功ありしが、而もみな策士流の事、當時策に於て之に  
 匹儔すべき者其の人に乏しからず。而して多く稱するに  
 足らず。只それ窮時に方りて顧託を受け、遺孤を擁して艱  
 險に當る。誠意忠節、少しも權を挾み、私を營める跡なく成

(一) 外蒙古、黑龍江  
 の上流。

(二) 甘肅省。  
 (三) 女眞又鞏鞏とも  
 いふ民族の滿洲  
 に立てた王國。  
 (四) 九世百二十年間。  
 陝西省、華陰縣  
 の東。

敗利鈍逆め料り難く、鞠躬盡力死して後已まんを期し、出で  
 ては將入りては相病を力めて大事を處し、遂に陣中に終り  
 しが群雄の中に特出し人臣たる者の儀表となれる、實に此  
 に於てし、彼は之を以て殆ど聖の域に到り、三代荒唐の時代  
 と雖も、能く及ぶ鮮し。成吉思汗<sup>ジンギスカン</sup>難河畔に起つて四方を  
 經略し、雄師の向ふ所朽ちたるを摧き、枯れたるを拉ぐが如  
 く、西亞を平定して東歐を侵占す。唯其の累りに領土を拓  
 けるは、宛も蠻酋の暴力を振ひて止るを知らざる觀あれど、  
 還りて六盤山に到り、病みて死せんとする時、左右に語りて  
 曰ふ、金の精兵潼關に在り。南は連山に據り、北は大河を限  
 る。以て遽に破り難し。道を宋に假るに如くは莫し。宋



(一) 今の河南省開封府。

と金とは世讐、必ず能く我に許さん。乃ち兵を下して、直ちに汴京を撞け。汴急ならば必ず兵を潼關に徵さん。然して數萬の衆を以て千里赴き援けば、人馬疲弊して到ると雖も戦ふ能はず。之を破らんこと必せり。と。其の敵を料り勢を察する、實に掌を指すが如く、眞に智略の遠く人に超えたるを見る。

(二) 英國の政治家、老ビットチャタムと稱す。1703—1778

チャタムは一代の偉績、英國の威名をして隆々世界の表に耀揚せしめ、世に第一流の政治家を以て目せらる。而も其の大なることの感ぜらるゝは此に在らず。既に官を罷めて後、英政府の米洲植民地に苛政を施きて誅求到らざる無きを攻撃し、以て雙者の間を善くするに努め、而して一旦米

(三) 當時の佛國王室

と佛と勢を聯ねて逆ひ抗し、而してリッチモンドが戦争を不利として講和を主張せるに及び、翻然前説を棄て、病を扶けて議院に臨み絶叫すらく、ブルボンの前には決して膝を屈すべからず。飽くまで戦争を繼續して最後の勝を占めざるべからず。と氣昂り、胸塞がり、其の場に卒倒し、昇がれて家に歸り、終に瞑したる、これ誠に七十年の生涯を振はしむるに足れり。フィリップ、シドニーは、エリザベス女王の眷顧を被り、名を當代に馳せにき。而も後人の感歎して措かざるは特に其の臨終の光輝を放てるに於てす。英軍に將として和蘭を援け、西班牙と戦ふや、飛丸に腿を貫かれて倒れ、流血淋漓、渴を覺ゆる頻りなり。從者百方搜索して僅か

(四) 英國の詩人。軍人。1554—1586  
(五) 英國女王、在位四十六年。1533—1603



に一杯の水を得、捧げて其の前に到る。傍に一兵卒の傷き倒るゝあり、氣息奄々、從者の盃を捧ぐるを凝視して、心大いに羨むものゝ如し。シドニー盃を口にせんとして、偶之を看、乃ちいふ、「彼の之を要する吾よりも多からん」と。盃を垂死の傷兵に與へたり。これ後人の今に及びて尙嘖々として稱する所。若し彼が最期に於て此の事無かりしならんには、シドニーの名は、或は忘れられたるかも知るべからず。而も年壯なるシドニーの光輝ある最期や、寧ろ爛漫たる春花の風に散ると状を一にし、麗は則ちこれありとも、未だ壯とすべきに至らず。之に反し、前に列記せる數者の齡傾きて尙志せる所に、淬勵奔勞し、斃れて而して已みしは、麗とす

べからずと雖も、壯は則ち餘りあり。以て秋葉の丹化に比すべきなり。(想痕)

三 山の温泉から

吉田 絃 二 郎

\*本名は源次郎。文學者。

四五日前、また山の温泉に來ました。今年はやつと夏が過ぎ去つたばかりなのに、いつもの神経痛が起つて來ましたので、毎日湯に浸つて居ます。山には已に秋の色が漂つて居ます。一枚々々の葉が光つて居ます。朝と夕暮には、きまつて雨が湯の町を洗つて、山を越えて行きます。

こゝの町では今夜が明月だといつて、芒の穂などを川のふ



ちから手折つて来て居ます。

山の月はまた驚くほど澄んで居ます。白い雲が山から出ては山に隠れて行くのを見て居ると、子供のころのことなどが思ひ出されず。

私は月を見がてら古い寺の山門をくゞつて行きました。

丁度夜のお勤が始つて居るところでした。八九人の坊さんたちが須彌壇ANIMATAの前を輪を作つて廻りながら、讀經をして居ました。水のやうな月の光が高い窓から御堂の中に流れ込んで居ました。そこには暗い柱のかげに一人の雛僧スベツラが合掌して立つて居ました。小さな猫が雛僧の足もとで背伸びをして須彌壇ANIMATAの後の方へのそくと歩いて行つた

のを面白いと思つて見て居ました。

坊さんたちは幾度か全身を投出すやうに跪ヒヤミいては祈り、祈つては讀經しました。

一本の蠟燭の前に幾人もの坊さんたちが毎夜このやうなお勤をすることを考へると、何となく嚴肅な心持にならずには居られませんでした。

たしかにあの形式の底には何か、潜んで居るに違ひない。十二三人の湯治客リュウヂヤクらしい男女が縁に近く跪いて居るのを見たときも、私は同じことを思ひました。

人間は何かをとこしなへに求めて居るのだ。人間は悠久ユウキウ永遠エイエンを思ふことなしには生きて居られないのだ。



人間は自分で何物かを求めつゝも、實際は何を求めて居るのか、恐らく永久に知ることには出来ないであらう。けれども、求めずには生きて居られないのだ。

經を讀んで居る人も頭を垂れて居る人も何物かを求めようとする心、何物かに頼らないでは居られないといつたやうな、たゞそれだけの純な、しかし本然的な魂の衝動に動かされて蠟燭の前に坐つて居るのではないか。

人類が生れて幾千年來、すべての人類が何を求むるかを知らず只祈り只經を讀み、只跪いて來たのではなかつたか。八人九人の御堂の僧侶たちの黒い衣を見て居る間に私の耳には人類全體の悲しい聲が聞えて來るやうでした。

誰でも神を忘れてはならないのだ。誰も永遠を思ふことを忘れてはならないのだ。

私はこんな事を考へながら山門を潜つて川岸へ出ました。高い山と山との間に挟まれた湯の町の燈が消えかゝつて居ました。私はこのやうな山の中にも、夜ごと永遠を思ふ人間の祈があり跪があることを思ふと、非常に人生といふものが寂しくはあるが嚴肅なものであるといふ氣にならずには居られませんでした。

人間が住むところには、必ずそこには永遠を欲する、或は悠久にあこがれる欣ベンリキ求心が生きて居ることを考へると、どうしても人生に對していゝ加減な心ではすまされなくなる



やうな氣がして來るのでした。

私は夜が更けてから宿に歸つて來ました。

「私が生きて居る間は、私から祈の心を失つてはならない。」

私は自分の心にかう命じました。

私はこんな殊勝な心になつたのでした。私は近頃になく

愉快でした。(草光る)

\*  
哲學者。

二 心と言葉

\*  
和辻 哲 郎

心と心を觸れ合せるには言葉だけに頼ることは出來ぬ。言葉は不完全なものである。二つの心の緊張が高まつて

その間にそこばくの隔りが感ぜられるやうな場合には、特にこの不完全が目立つて來る。思ふことを單純に言ひ現したつもりでも、相手がまるで違つた方向に刺戟を受けることは珍しくない。觸れ合はうとする心はいつまでも言葉の奥にちゞこまつてゐて、中心を離れた枝葉の問題の上に、いら立たしい神經と我執とを衝突させるのである。興奮の度が強まれば強まるほど、言葉の不完全が産み出すこの葛藤は烈しくなるやうに思はれる。しかしこの不完全な言葉を使つても、心が何のこたはりもなく、素直に向ふへ通ずることもある。時には其の言葉の必要さへもない。それが言葉の上の詳しい説明や了解を



必要とする筈の場合に於てもさうなのである。だから言葉によつて心を通ずることは出来ぬと言ひ切るわけには行かない。しかしまた、言葉で説明しさえすれば、心は通ずるものだと言ひ切ることも出来ぬ。

二

心が通ずるのは心の論理がとほつてゐるからである。頭の論理がいかに正確に言葉の内に現れてゐても、心の論理がとほつてゐなければ、人の心を承服させるわけには行かない。

例へば、或人の行爲に對して非難の心持を経験するとする。その行爲の正しくないことを指摘して、それを改めさせる

のは確にいゝ事である。しかし、その行爲の正しくない所以を、いかに明白に説明して聞かせても、それが頭の論理で押しつめられて行く間は、相手は決して承服するものではない。こちらの立場から、相手の行爲を不正と判断しても、相手は相手の立場で、何かしら辯解を持つてゐる。その辯解を悉く説き破つたところで、相手の心は反撥の力を強めるばかりである。純粹に理論の問題を討議するやうな具合には、決して行くものでない。それは人間の行爲が、その人の性格や氣質に根ざしてゐるからである。當人にも、頭の論理だけで自分の行爲を支配することは出来ない。彼が道德的反省によつて、自分の行



爲を制御しようとする場合には、著しく自分の心の論理に頼つてゐる。(もしこの事がなければ、古來の倫理學は物理學と同じ運命を享受し得たであらう。それ故に、他から頭の理論で押しつめられても、それによつて行爲を改める情熱が湧いて來る筈はないのである。むしろ彼の性格や氣質に對して十分同感してくれない相手の心情や論理的に自分の立場を覆さうとして來る相手の征服慾などが、問題の焦點たる不正の指摘よりも、遙に強い刺戟を彼に與へるのである。

たとひ忠告者の心に、正義に對する情熱が燃えてゐるとしても、又その忠告が非常に正しいことであるとしても、相手はその忠告の内に同情を感じずして、たゞ征服慾を感じるのみであるならば、忠告者の心は遂に相手の心に觸れることが出來ないであらう。忠告者が相手を好くしようとしてゐる親切な心も、かういふ場合には現れる場處がない。いかに言葉でそれを説明しても、相手の心には響かない。言葉は必竟空である。

三

匹夫も志は奪ふ可らずといふ古い言葉がある。頭の論理のみを以てしては、正に其の通りである。もし上役から頭の論理だけで押しつめられて、すつかり參つてしまふ男があるとすれば、それは利害打算の上からさういふ振をして

\* 子曰、三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也。(論語)



\*人生感<sub>二</sub>意氣<sub>一</sub>、功名誰復論(魏徵述懷の詩)

見せるのであつて(若しくは自分自身に對してもさういふ假面を被るのであつて)決して正直な心の持主ではない。意氣に感ずるといふ古い言葉がある。心の論理による説服にはこの現象を見ることが多い。心の論理の地盤をなすものは愛であつて、愛は心と心とを結びつける最勝の力だからである。(偶像禮拜)

\*名は藤吉。俳人。新俳句を唱道す。

芭蕉は黒い法衣を着け脚絆と草鞋とで長旅の装束を固めた。身に附けた物は、行脚の僧が用ひるやうな頭陀袋と笠

二五

芭蕉

荻原井泉水

と杖とだけであつた。そして禪宗の僧が用ひる木の實の珠を綴つた珠數を手につけて居る様は、全く雲水の僧侶としか見えなかつた。頭も綺麗に剃つてゐた。彼は背も低く肉も瘠せてゐる上に、持病の爲に姿勢が痛々しかつた。唯顔容には何處となく犯し難い颯爽たる様が表れてゐた。それは弱い體力に打勝たうとする強い氣力の閃であらう。色白な薄痘痕の有る細い面立に、鼻が高く顎が如何にも神經質らしく尖つて一文字な濃い眉と、きつと結んだ唇とが意志的な様子に見える。其の常に見慣れてゐる師の顔が、此の日は殊に澄んで、凜とした決心を藏してゐるやうに、弟子達の心に深く印象せられた。

芭蕉



彼は久し振で故郷を慕つて歸省するとはいふものゝ、其處には父も居らず、母も、自分が江戸に来てゐる間になくなつた。今は兄一人の肉親があるだけである。友人、故舊とも、十年あまりも歸つたことの無い自分を忘れてゐるかも知れぬと思はれる。彼の愛を牽くものは、故郷の人々よりも、寧ろ江戸に居る門弟達であつた。自分のために、快い水邊の住ひを二度までも造つてくれた彼等の好意と、自分の旅立を送つて、斯く心からの名残を惜んでくれる彼等の純情とを思ふと、此の深川こそ、自分の本當の故郷のやうな氣がした。初は故郷へ歸らうとして喜んでゐた心が、いざ出立するといふ時になると、不思議にも、宛も故郷を立ち出で

るものゝやうな哀愁をさへ覺えたのであつた。その上彼は、心では強い信念を持つて居るものゝ、此の長旅が無事に終へられるだらうか、といふ懸念が無いではなかつた。東海道を下つて伊賀までの道は、嘗て通つた處ではあるが、其の時は三十歳に満たぬ血氣の壯んな頃であつた、今では自分の體力がまるで違つてゐるやうだ。それでも宿々の便利の多い海道の事だから、何も苦しいことは無いが、若し途中で病氣にでもなつたならば、とても救はれまいといふ氣がする。そして、其の豫感が何となく眞實性を帯びてゐるやうにも思はれる。弟子達は、彼の爲に送別の句を呈して一覽を請うた。彼も亦、留別の句を書いた。



野ざらしを心に風のしむ身かな。

師の首途の吟が、悪い識をなすのでなければ幸だがと、弟子達は眉を顰めた。彼自身にも、道端の草の上に自分が打倒れてゐる姿——蕭々と吹く秋風の中に、誰のとも知れぬ白骨が晒されてゐる様——が眼に見えるかとも思はれたりした。併し、それは自分の句が作り出す幻想なのだ、ほんの假想でもそれを句に仕立て、見ると如何にも現實のやうに思はれるのは、よくあることだと思ひ知りながら、彼は見送りに集つた弟子達と袂を分つた。八月の空は薄曇つて、本當に秋風が身にしむ程の冷氣を感ずる日であつたのである。

○

年の瀬も押しつまつてから、芭蕉は伊賀の故郷に歸つた。三年前に、十年振で戻るまでは、故郷といふものに對して、さして愛着を覺えずに居つたのであつたが、此の頃では、何といふ事なしに、自分の生れた土地が懐かしく感じられる。それも、自分が老いた爲であらうかと思ひ合せられぬでもない。自分は家を持たない、自由に獨り山水の間に放浪して、旅人としての心に生き切らうとする、其の旅の目ざす地は何處か——と自問自答するならば——萬人の心の故郷だ、大自然の懐だとは云ふものゝやはり、自分の身の故郷、肉親の居る家に居る時こそ、本當に母の懐の味が想ひ起され



て暖い感じになるのであつた。三年前に戻つた時は、久々で兄にも逢つた事だけが嬉しかつた。昔の友人にも訪ねられたりもしたが、其の人々からは何となく疎まれてゐるやうに感じられて、たゞ淋しい思をしたのであつたが、其の時、二三の人に新しい俳諧の話などをしたのが、意外にも此處に心の苗を植ゑる動機となつて、今は其の道の友がまた自分を迎へてくれた。それといふのも、此處が自分の本當の故郷であればこそだ、其の上で自分の言葉を生かす親しみがあつたればこそだと思はれる。其の人々は本當に自分を理解し、自分達の道の爲に勵んでくれるらしい。斯ういふ同人を得た此の上野の地は、

たゞに肉身の故郷では無い、自分の藝術の爲にも故郷となつたといふ喜を、芭蕉は新しく感ずるのであつた。どこの家も新年を迎へる用意のため忙しいやうに、彼の兄の家も、餅を搗いたり、飾るべきものを整へたり、又家の隈々までの煤を掃いたりした。彼はふといつも薄暗い佛壇の隅の方に長方形に折疊んだ紙包が幾つか置いてあるのに目が觸れた。手に取つて見ると、紙の上に書かれた文字は、はつきり見えぬ程煤けてはゐるが、其の一つには確かに自分の名が記されてあつて、其は自分の臍の緒を包んだものであつた。四十四年の昔の記念だ、自分が此の家で臍の緒を切られた時、それは自分には記憶にはある譯は無いが、母



は産後の日立がわるく、乳も出ないので乳母を付けられたが、自分は弱かつた。其の後、父は卒中<sup>ソウジュウ</sup>で死に、母も引續いて床につき勝であり、家内は出費が續いて、家督を繼いだ兄も餘程難澁<sup>トシゴト</sup>をしたらしい。それから自分江戸へ出る。母はその心配もあつたであらう、病氣は益、悪くなつて、遂に亡くなつてしまつた。其の葬式にも自分は歸らなかつた。——つまり自分は此の家不幸と勞苦を齎<sup>モロ</sup>す爲に、産れて來たやうに思はれる。殊に母には養育の苦勞を掛けた上に、其の万分の一さへも報恩することが出来ずに、却て、どれほど歎を與へた事か知れない。そんな事を憶ひ出すと彼は自ら涙がにじんで來るのをどうすることも出来なかつた。

斯うして暗い運命を擔つて、四十四年は生きて來た。そして此年も暮れようとしてゐる。彼はその紙包を元の所に置いて、暫く父母の位牌の前に合掌してゐた。ふるさとや臍<sup>へら</sup>の緒に泣く年の暮。

○  
庵を取巻く虫の聲は、晝のうちでも唧々<sup>唧々</sup>と水の涌くやうである。芭蕉は眼に見える凡ての物が靜かに地上の秋を感じてゐるらしい氣色の中に、曾良が植ゑてくれた菊のすくすくと伸びた姿から、軒の芭蕉の葉の破れがちになつた有様を眺めてゐた。すると、あるかなしの風に觸れながら、ふらふらと動いてゐる一つの物を見出した。それは軒先か



ら細い絲を引いて下つてゐる一疋の蓑蟲であつた。木の葉を編んで身體を包んでゐる其の虫は、破れた紙衣を着て旅をして歩いてゐた自分の風體とも似てゐた。何の頼む所も無く虚空の中に吹かれてゐる其の蟲の心持も、孤獨にして江湖（せう）に漂泊する自分の心持に似てゐる。芭蕉は其の虫を哀れがつた。清少納言は此の虫が「ちよよ」と鳴くといつてゐるが、本當に鳴くならば其の聲を聞きたいものだ、又誰かに聞かせてやりたいものだと思つた。

蓑虫の音をきくに來よ草の庵。

から書いて彼は、濱町なる嵐雪の許に届けてやつた。

嵐雪は、早速に聞きにまゐりますと、返事の手紙を持たして

よこした後から、訪ねて來た。嵐雪は門口で聲をかけたが、應へる聲も聞えない、是は留守であつたかと思ひながら、彼はずつと座敷に上ると、そこには芭蕉が兀然（げんぜん）と座つてゐた。「おや、蓑蟲の聲を聞いておいでになつたのですか。」と嵐雪は笑ひながら座つた。芭蕉もをかしかつて、「なに今に鳴くよ。」と云ひながら、自分で立つて茶器など取出して來た。芭蕉は紙衣を着て居たが、それが古く皺になつてゐるので、起居（けいこ）に何の音もしない、嵐雪は故ら（こら）に感心したやうな顔をして、「蓑虫の聲が先生には聞えるといふのも、先生が餘り靜かにしてをられるからです、私のやうな性來騒しい者にはとても聞えませんが、つまり蓑虫の淋しい心が、先生の靜かな



心に觸れて鳴るのでせう、是は實に神祕なものです。しかし蓑虫も餘り鳴いては先生がお喧しいぞ、もう鳴くな。などと、又諧謔ハイチャウを云つた。

蓑虫は素より鳴かなかつた。芭蕉も嵐雪も、初から鳴かうとは思つてゐなかつた。そして師から蓑虫の句を送られた時に、嵐雪は近頃人戀しく淋しくてゐる師の心がひつたりと感じられたのであつた。

芭蕉の近くにある素堂ソドウは此の話を聞いて、興があつた。そして、蓑虫の説といふ一文を作つて見せた。芭蕉はその文を面白く思つた。又朝湖アサウミといふ畫家は此の事を聞き傳へて、蓑虫の圖を描いて送つて來た。

芭蕉は、自分の蓑虫の一句が緒オモとなつて、素堂の文を得、朝湖の畫を得たことを興じた。これで蓑虫も意外の面目を施した譯だなどをかしかつた。(旅人芭蕉)

三 死と永生

高\*山林次郎

死は生きとし生けるものゝ免るべからざる運命なり。夫唯免るべからざる運命なり、故に又避くべからざる問題なり。されど生を惜む人はあれども死を惜む人は少く、生について慮オモる人はあれども死について考ふる人は稀なり。訝イカしからずや。

如何にして生くべきか。是人生の大いなる疑問なり。然

\* 號は釋牛。  
文學博士。  
文藝批評家。  
明治三十五年歿す。



\*生老病死。

れども如何にして死すべきかは更に大いなる疑問にはあらざるか。我等は歴史を讀みて大いなる宗教の起るを見たり。されど宗教とは生きんがための教にあらずして、死せんが爲の悟なり。釋迦は人生の四苦シツクに感じて解脱ゲツトクの途を説きぬ。耶蘇は同胞の宿罪を贖ユクナうて永生の道を開きぬ。解脱や、永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の説ける哲學の旨趣も亦これに外ならざるなり。天地人生の理法を明かにするは、人をして安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とは所詮ソケンは死を安からしむるの謂にあらずや。道德は現世の爲にのみ存するものにあらず、名譽の不朽を思ひ事業の永遠を言はゞこれ即ち死後の世界

を言ふなり。あはれ其の生を見て其の死を見ざる者は人生の根本を遺ウツれたるなり。死はすべての物の終にして、又すべての物の始なればなり。されば人々死を考へよ。死を考ふるは即ち人生の目的を考ふるなり。死滅を考ふるにあらずして永生を考ふるなり。かの死生の優劣を争ひ、人生の價値を疑ふものは愚なるかな。我等は生を知る、未だ死を知らず、如何ぞ其の優劣を知らんや。人生の價値は絶対なり。他に比すべきものなし。厭世エニセイと謂ひ樂天と謂ふ、我等其の何の意なるを知らず、我等は唯人生の實在せるを知るのみ。されば吾等は生きざるべからず。永遠に生きざるべから



ず。死は萬物の運命なり、されど我等は死を<sup>テリツ</sup>超絶して其の永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得んか。人生<sup>ウチノミチ</sup>究竟の問題茲に集る。

世に神に禱りて永生を求むるものあり、佛に願ふものは人生の倏忽<sup>シユウツツ</sup>を歎きて涅槃<sup>ネハン</sup>の寂寞を求む。されど形體を離れて魂魄<sup>コウバク</sup>なきを如何にすべき。其の墳墓を壯大にし、金を鏤<sup>ウツ</sup>め、石に刻して名の後世に傳はらんことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人<sup>ヒト</sup>渝<sup>ユル</sup>り、滄桑<sup>サウサウ</sup>幾度か變轉して、墓標獨り全きを得べしや否や。かくの如きは永生の道にあらざるなり。

まことの永生は名によりて生くるにあらずして、事によりて生くるなり。儒教の存せるところ、今なほ孔子あらざるはなく、佛寺の建てるるところ、到る處に釋迦あり、耶蘇は十字架にかゝれりと雖も、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激する者の胸には楠公其の人の生命あり、蒸氣機關の動くところにはワットの血液あり、電氣の線のかゝるところは即ちフランクリンが永生の地にあらずや。まことの永生は時と共に深さを加へ、人と共に廣さを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々<sup>タウタウ</sup>汨汨<sup>キツキツ</sup>として遂に世界を動かさずんば已まざるべし。十九世紀の文明はかくの如き幾多永生の結果に外ならざるなり。







由事...  
山...  
...

女子...  
本...  
...

